第四百二拾九號目次

社告

◉本誌は每月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉二十五日發行の分は即ち本號の如くにして、女界敎界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置くと、即ち前號の明證するが如し

○本誌の定價の割合に廉ならざるは、特に遺憾とする所なり、然れども事務に迂なる吾等の事業に於ては之を如何んとすると能はず。即ち、定價は元の如く、一冊無郵稅十錢に定むべし。

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

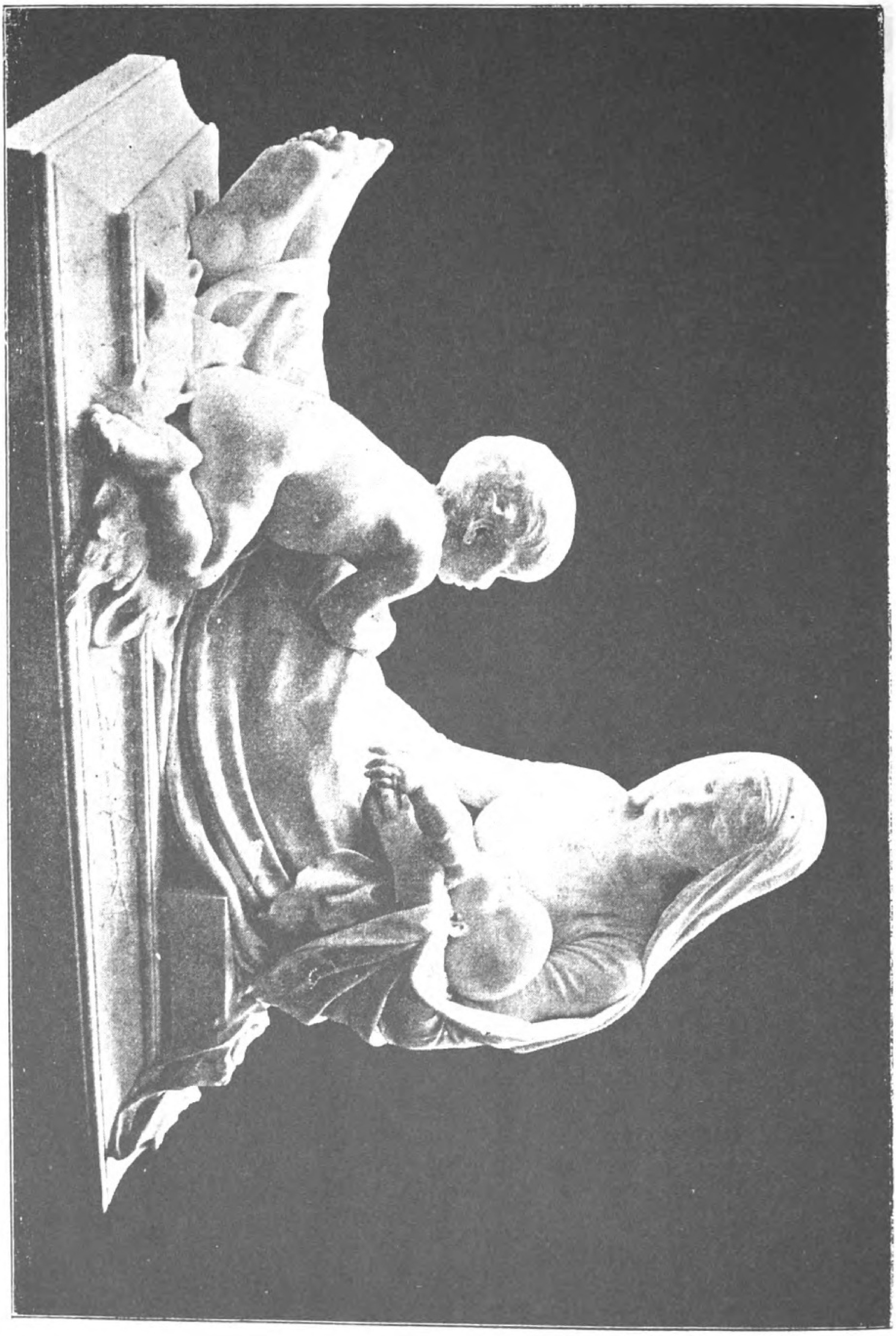
女學雜誌定價表

前金	壹冊　金拾錢 一年前金　金貳圓（無郵稅）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし◯郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

第四百貳拾八號目次



時文



女學雜誌
第四百貳拾九號
明治二十九年十一月十四日發兌

社説

家庭團欒を見ざる盲人

人に色々の目あり。肉眼は第一の目なれば言ふ迄もなし。文字を讀むには、文字の目あり、此の目なきを文盲と云ふ。見識を立つるには、見識の目あり、めくら千人にめあき千人と云ふ其の目明きは見識の目あるを云ふ也。歌を詠むには歌の目あり、古物を鑑定するには鑑定の目あり。目利、目付、目あかしより、見据をつけ、見込を立て、見當を定むるに至る迄で、何れか皆な夫々の目を要ゐざるものやある。

左れば亦、凡そ見ざるを盲人と稱し、盲人にも種々あり。本來、目を失なつて見ざるもあり、目あれども病んで見ざるもあり。此等は肉眼の盲人なり。其他、文盲と云ひ、心盲と云ふものも、ひとしく亦た盲人の中に算ふ。其の不自由と不憫なることに、何れか優劣あらん。

明月に座頭の妻は涙を流し、花ならば手にも取りて盲人に見せんと云ふ。盲人の月を見ること能はざるは如何にも殘念なれども、扨て月と云ひ花と云ふ其の麗はしきものを肉眼には見ながら、寧ろ團子に及かずと言ひて一片風雅の眼識もなき族は、其の心盲亦た口惜しからずや。

茲に題して『家庭の團欒を見ざる盲人』と云へるものも、一種の目しひなり。此の目しひの目には、見れども見ざる一道の景色あり。其のいぢらしきこと他の盲人に異ならず。早く其の眼病を治せざりしによつて斯の如しと思ひ、翻つて世上滔々同類の片輪多しと知ては、速やかに仁術の行はれて其の療やされんことを冀はざるを得ず。

凡そ草木の成長には日輪の温氣を第一とす、日陰に物の育たざるをもて知るべし。人も亦た斯の如く、只管ら温氣によりて育つものなるが、温氣の中、父母の温愛と家庭の温和とは第一に莫る可らざるものなり。此の温かみを十分に受けて

穩やかに、ゆつたりと育ちたるものは、氣質、のんびりとして究屈ならず、すらりとして矯激れず、物事を眞直に見て、情念の至つて愛々しきものなり。斯ありてこそ、人の誠を察し、其の美を認め、之を信じて疑はざるの眼はじめて開け、人間を心の正面より觀察して、其の本色を見拔くの目を得るなれ。人を見るも既に斯の如くして、一切の人事を見るは亦た其の調に外れず。隨ひて世間を觀じ、天地を眺むるの見樣には此の趣きを失はず。一道の景色、自づから心眼に映じて直覺して疑はず、世間人事、大率樂しうして悠々たることなれども、彼の日陰ものに至つては然らず。不幸にして溫氣の育てを受けざれば、氣質曲りひねり、邪推多く、物の見樣、曲折して、絶えて素直ならず、万事を疑ひ、事々に裏面、暗面を窺がふ。前の人は、人に鬼はなしと觀ずるに、此人は、人を見れば泥棒と思へと用心する類にて、眠りても匕首を離たず、人生の繼子、食客の如し。人情を思はずして、義理を思ひ、直覺を感ぜずして、理窟に泥むは、大抵此の流れの人の末なり。其の歌にも、哲學にも、人生觀にも、着々此の悲しき調を存して、一種の心眼の尚ほ開けざることを證す。亦是れ盲人の班を免れずとして歎かざるを得ざるもの也。

二

世には、樣々の議論を立て、中には鳴滸なる哲學を組織して、異樣の說を述るものあれども、詮ずる所は、其の人の氣質感情の次第によりて、廣き天地を色々に見立てたるものに過ぎず。故に、議論の根柢は大率ね其人の情質に由來するとなるが、扨て此人にして、家庭の團欒に接したると接せざるとによりては、發して其の一家立論に莫大の懸隔を生ずるなり。人間の本心を惡なりと云ひ、又は利己に存すなど言ふ人々は、其の經歷中、家庭の不和によりて氣質を害せられたるか、又は甚だしき不調子を見て之に感慨したるの結果なり。善き人は、善き心の庫より善きものを出すが如く、亦其の善きものを映す眼により總ての善きものを引入れて胸に藏す。もしも、正統本色の眼開けて、一切世間の眞面目を映ぜんには、悲觀厭世の裏に、樂天を善美を認めて、心之を疑はんとすると尚ほ能はざるほどのものなれば、安くんぞ自から卑うして天地を禽獸界の如くに解釋し得べけんや。必竟は、心盲して、樂地を見ず、宛がら風流の目なき族が花を見て花を味

ばざるが如きの故なり。

才藝あれば立身出世は出來るもの丶如く思ふ族もあれど、事の實際を看よ、事實は惣べて之と反對せり。人に好かれず、人に信ぜられず。所謂る人づきの悪しき氣合ひの人物は、才に富み藝に長けたりとも世に出んとは難し。自身は頗ぶる憤慨して世人の眼力なきことを罵しれども、其の過まちは必らずしも世人の上に存せず、反つて我身の上にありと覺悟せざる可らず。愛嬌なきものが人に好かれず、心だての優ならぬものが人に信ぜられぬは、理の當然にして之を憤ふるは抑そも愚しきことならずや。斯て折角の才藝を埋れものとし、己も損し世をも益せざるは、遺憾至極の事なり。然るに、此の人物が斯る不愛想の悪まれものとなりたる由縁を考ふれば、其元は多分、家庭團欒の感化なかりしが故にあることを發見すべし。

但し此の例は才藝に長じたる人の喩なれども、扨て又、其の才藝に秀づるに至ても、家庭の温化なきものに於ては至難の事なるべし。學校に多くある書生の中にても、學問を職業の如く心得、錢と交換して智識を得、其の智識も只多ければ得になる樣に思ひて勉強するものもあり。斯る野卑なる調子の書生に限り、詩歌の趣味を知らず、物外に超然たる樂地などに達することは六かしきもの也。又、一藝一技と雖ども、其の道、其神とする處に悟入せんには、金錢名利に拘泥する底のさもしき心得にては適ふ可らず。邪念を拂ひ、我慢を斷ち、只だ信じて身を挺して飛込む丈けの勇猛心なくんばある可らざる所、此の覺悟を有するものは、大率ね家庭團欒の裏に眞直なる氣質を稟けたる人物に限るが如し。偶たま例外の人もなきにあらねど、そは亦た例外の感化を蒙ぶりたるの故にして、之を尋常に求む可らず。家庭の温化は、才藝の達人を生ずることに迄で、無上の大關係あることを知る也。

マンモウス、ケーブに川あり、水、洞穴の内を流る。此の流に棲ふ魚は、むかし目ありしかど久しく日光を見ざるの故に次第に衰へ、今は全く盲魚となりしとかや。傳へ云ふ、比目魚、鰈の類、初めは横に泳ぎ、其の眼、左右に附いたるが軀扁平なりて平らに泳ぐこととなり、其の眼一方に集まりたりと。目の着け所によりて其の位置を變ずること如斯し。目を用ひざるによりて視力を失ふこと亦彼の如し。左らば、家庭團

欒によりて初めて開かるべき其の眼を開かず、家庭團欒によりて次第に用うべき其眼を用ゐずば、盲となり眇となると、勿論なる哉。吾人は、此種の不具者を憫れむと、何ものよりも切なり。

家庭

養蠶の經驗より得たる育兒法

相馬愛造

別け登る麓のみちは多けれど、同じ高根の月を見る哉。

氣象學者が晴雨計にて天候を觀測するときに、船乗りと農夫とは雲形にて察し、勝手元の内君は飯の煮立ち加減にて、その日の晴雨を知るとかや。蓋し造化の御業は差別の中に統一あり變化の間に定則あるものなれば、一理を究めて他の理を知り一源を尋ねて二源を發明するがごとき事少なからざるなり。昔者ダーウィン氏蚯蚓に就き三十餘年の研究を積み、終に彼の有名なる生物進化の理を確めしと聞きぬ。されば蠶兒に就きての吾人の研究も亦多少人生に寄與するものなきを保せず。乞ふ試みに其一二を說かん。

第一　幼時の養育極めて大切なり

養蠶第一の秘密は毛兒を飼育するに最も丁重信切に致すにあり。彼の有名なる丹治ふか子（編者曰、丹治ふか子の傳は、本誌去る廿七年發兌の、第三百八十一號より第三百八十三號に至る史傳欄に掲ぐ）の蠶兒が本邦第一の肥大種なるは、全く毛兒の際に於る特別なる注意に基するなり。總じて毛兒の際充分勢氣づきし蠶兒は、他日不充分の扱ひを爲すことありと雖ども、尙能く良好の結果を奏するものなり。是に反して毛兒の飼育に於て不親切の事あらんか、爾後の飼育に何程の注意を加ふるも、決して善良の効果を見ること能はざるなり。余は此理を推して吾人々類の衞生法も又之と等しきものあるを知る。今我邦小兒の健康如何を見るに母の乳にて育てらるゝ出産後一年位の間は、之を歐米の小兒に比較すれば一層健康にして死亡の數も少なし、即ち歐米にありては生兒百中一年間の死亡數は十八人より二十人なるに、本邦にありては十三人より十五人に過ぎざるなり。然るに其後小兒が食物を食する

頃に到るや、我邦小兒の死亡は却て歐米よりも多くして成長の後も躰格彼に及ばざると遠しと云ふべし。余は此不幸なる現象の一源因は確かに乳離後の食物不良に歸すべしと信ず。小兒乳離の後は腸胃尚薄弱にして粗硬なる食物を消化するの働きなきものなるに、我邦の習慣として粗硬の食物を給與するが故に爲めに腸胃を害するに至るなり。幸にして其害の少き者も後日大に成長せんとするの勢力を減殺するを免れざるなり。斯くて成長の後衞生を重じ滋食を攝收するも幼時の欠を補ふの効力なきものとす、蓋し滋養多き消化の易き良食を一般に用ゐん事は、生計の程度低き今日に望み難き事に屬すれども、乳離後の數年間は是非共其食物を最も精撰せざるべからず。此數年間は恰も蠶兒の發生後一眠に到るの數日間と相當するものなれば、此時の注意如何は小兒一生涯の運命を左右するものと知るべし。

第二　水分多き飲食物は子孫をして虚弱ならしむ

蠶兒ありて之を見に水分多き豐肉の桑葉にて飼育なしなば、其外形は肥大なれども、躰質柔軟にして擧動敏活ならず、而して之より生ぜし子兒は虚弱にして矮小なるを通則とす。故に蠶種の製造家は砂地に生せし水分少き硬葉を擇び用ゐるなり、之を牧畜に於てすると同一なる原則ならん。因で吾人々類もこの理に鑑みる所なかるべからず。今本邦人の食物及び飲料を見るに、其水分の夥多なる驚くに堪へたり。主食たる米飯は既に甚しき水分を含み、之が副食たる汁及び菜は一層の甚たしきものなり。加之居常の慣習湯茶を飲用する殆ど度なし。余は之が爲めに代々子孫を弱小ならしめ終に今日の小人種と變化せるを信ずるなり。今邦人に比して躰格强大なる、歐米人、支那人、朝鮮人、亞米利加インデヤン、南洋諸島土人の飲食物を考ふるに大に我邦と異にして水分極めて僅少なり、彼等多く穀類を燒きて麵麭樣のものとなして食す麵麭は水分百中の三十七にして、我邦米飯は百分中六十五より七十の水分を含むものなり、其差は大に大ならずや。朝鮮人は米食を爲せども米を蒸して食するが故に水分は僅かに百分中四十三に過ぎざるなり、又肉及び蔬菜の如きも各國概ね燒き或は鹽藏して用ゐ、我邦の如く汁にて煮る者は稀なり、其他湯茶を飲用すること邦人の如く甚しき者は絕てあるとなし。世界最大人種の一なる、ヒージー土人の如きは麭麵と菓實

の液とを飲用するの外一切の水分を飲用するとなしと云ふ。邦人と諸外人との著しき相違あるは今日の躰格の徑庭を來せし一源因なりと論斷するも全く理なきにあらざるべし。故に余は一般に水液過用の慣習を革めん事を望み、特に孕身中の婦人、小兒に乳を與ふる母たる人は一層の注意あらんことを勸むるものなり。

栗に毬あり柿の實は赤し

栗に毬あり、柿の實の色赤きは何故ぞ。

諺に、桃栗三年、柿八年、梅は酸くして十三年と云ふ。栗は至つて早く成長し、少き中より果を結ぶものなれば、親木の傍にて日陰に種を下すをよしとす。夫故、親木の近所に落んと欲して、毬を嚴めしく鎧ひ、鳥烏が啄ばんで遠くへ持去るまじき樣に身構へたり。柿は之と違ひ、親木とはなれて、日あたりよき所に、成育したしと思ふ獨立的の木にて、大器中成とも云はんか、少こしは修養の時期を長くするものゆゑわざ／＼其果を赤くして、烏鳥の目を引き、之にくはへられて遠方へ持行かれんとこそ願ふなれ。但し、其の種核の未熟の中に取られては、月足らずの子となつて成育も六かしければ、此際は、色を青くして柿の葉の中に甘くかくれ、其上、味ひを澁くして容易にくはれぬ算段を爲す也。

桃は、樹脂をつけ、梅は酸味を帶びて、未だ熟せぬうちは成るべく取られぬ樣になす也。紅葉の實は、羽根をつけて風に乘じて飄々乎として遠く飛ばんとする用意せり。

誰か草木を無情と云ふ。無情の草木すら尙ほ其子を愛すると斯の如し。人にして之に及かずんば如何ん。

焼藷屋の變遷

さろ男

秋冷膚に逼まりて、人多く焼藷の温かきを思ふ。蕃藷先生の厚德を嚮ぐもの、八百八町臻る處に其店を張り、ざる、風呂敷を運ぶの客、夜明から既に賑はし。扨てさる男が住まへる邊にては、認むる處今年に入りて、西京焼といふが其處彼處に在りて、去年までは川越本場切焼を商なひたる家も、之に趣きを變へたるが尠からず。思ふに他の區にても同樣なるべ

きか。これは去年あたりよりチラホラ行はれかけたるに、此秋に入りて俄に其數を加へたるが如し。

西京燒流行の由來を推するに、大抵の芋屋で見ると、夏は氷屋を營むものが多く、其の時には燒芋の土竈を取除け、秋口になりて築き直すにて、毎年々々の手數かゝるとなるに、此の西京燒といふので見れば、鐵板製のこんろの大きなるやうの圓き竈を用ゐるが故に、不用の節は仕舞おかるゝより、土竈に於けるが如き手數なきを以て、兎に角に之に變じて見るもの、多きを致せしならん。されば土竈を年中其儘に据つけ置く樣の家にては、此風を採らず。尤も京都の燒藷屋は、土製の竈の、東京風の床より築き起したるものとは異なりて、運搬自在なる、恰も通常の竈の少し風ちがひて、大きゝやうのものを用ふるとなるが、何人か此風を東京に移すに當りて、輕便向きなるを考へて、今の鐵板製を用ゐたるものと見えたり。

又在來なるは藁を燒くかなれど、この竈にては炭を用ゐると京都に同じ。其燒方は、全く其名の如くに彼地の風を眞似て、藷の皮を取り、薄く切り、胡麻鹽を振りて燒くなり、併し京都の程に甘くなしとは、其地の人の話しにて、また在來の燒方なるよりも味よからざるかのやうに覺ゆ。皮を取るの世話と、炭を用ゐるの價と、其又名目の變りたるとにて、直段も是迄のとは少し高きやうなりといふ。

西京燒なれば、尋常の店付にても出來うべく、角行燈の白紙に○燒、きり燒と記したるよりは、赤紙の細長き行燈に、名物西京燒など志るしたる、一寸目先かはりて、人の注意を惹くべし。此燒風は今後必ずおほく流行すべし。志かし其味是迄とは惡きやうにては、また元の風が喜ばれて、新風自然衰ふるに至らん。

經驗悉く信ずべからず

もみぢ

經驗したといふ事素より重すべきではあれど、また強ちに信用すべきものには非ず。例へば學校にて家政の事など敎ふるに、此事とても、元は他人の經驗より割出したる敎へにて、必ずしも空理にてはなかるべき、多くの女學生が家に入りて後に嘆じていふを聞けば、學校にて習ひしとは、單に理想で

あつて、實際には出來ぬことだと經驗したとはいふ。成程實際に應用出來ぬ箇條は多かるべし。しかれども亦彼等がいふ、其經驗の價値は如何にといふに、彼理想として排拒するものをば、先づ十分に實行して見やうとして、其上の經驗かと思へば、否な〻〻、其方ではなくて、あまり實行して見もせずに、出來まいと速了して、出來ないと經驗したとて威張らるゝなり。其經驗なるもの果して何の價値かあらんや。經驗したりといふ事には、此類の僞物多ければ、よく鑑定した上ならでは、一概に信用のなし難きものなり。

鏡にむかつて己惚の人

すれ男

嫁入の時、母は餞むけに鏡を與ふ。之をもて己惚れよとの旨にあらず。嫉妬の心起らば之に向つて寫せ、胸のほむらの炎〻たるが見ゆべきぞ、悋氣の心起らば之に向つて寫せ、額の角の鬼〻しきが見ゆべきぞと、即ち戒しめの鏡として賜はりたるものなる。扨ても、此の敎訓を奉じて、朝〻夕〻之に對して吾が姿を映ずるの時、省りみて心の我慢を抑るの具となす佳人幾何かあると思ふにつけて、世には己惚かゞみと稱へて姿の美くしく映るをのみ祈る淫れ女の夥だしくあるこそ心にくけれ。余は一と月に一度位は鏡に向ひ、久し振にて吾が御面相を拜し、さて〳〵鼻の低さよ、さても〳〵眉のきたなさよと驚ろき眞とは失望して大に勇氣を落すとなれば、毎度、鏡をのぞく族が自分ながら器量を自慢すると云ふ譯のあるべき筈なし。鏡は凡て近く吾が顏をうつすものゆゑ、なくて七くせ、何程かの難はあるべき顏を極めてあり〳〵と見せ何處にかある其の疵傷を示すものなれば、之を見て己惚れると云ふ道理のあるべき筈なしと不審禁ずる能はず。夜目、遠目、傘の內は美くしくも見すれ、鏡に向つて美を誇るとは如何の次第ぞとて、近頃ろ多くの人に問ひ試みたるやうは、抑そも器量自慢をする己惚ものは、最初、鏡を見て自から發明せしものか、又は、人からおだてられて己は美くしいものだと免許したるものか、其の何れにてあるらんと質すに、大抵の人の曰く、過半は、人に言はれて自から其氣になり、其氣になりて鏡に向ひ、色〻と言ひ譯をして、是で美くしいのだと免許せるものなるが、其他は、かの己惚鏡が好く見する故の誤解

とぞ答へし。さても〳〵人のをだてと、己惚鏡なるものゝ罪の深さよ。もし此の二つを亡ぼさば、世上の自稱美人、十分の七八は減ずるならんと、余獨り甚はだしく慷慨す。

化粧の今昔

いぢわる

昔の婦人がお白粉を付けるのは、そりや勿論飾るといふ意味は、澤山にあつたには違ひなけれど、其内禮義作法の上からといふ考が、十分に存してゐた。自分より目上の人、近くは夫より、遠くは、王公貴人に接するにも、または婚禮、葬禮其他の大禮小禮に臨むに、いやしくも婦人たるものが、お白粉、臙脂を付けないといふは、甚だ失禮なる事にて、其化粧は、帽子、被衣、覆面などを着ると、同じ意味のものらし。其白粉を付けるといつたら、お白粉下を塗つておいた上に、つけたも〳〵厚板の樣につけたが、これは必ずしも地顏を蔽ひ隱くす爲めではない。其證據には、額は富士額に際立つて白く塗るから、生え際の地色は、其儘ハツキリと見えてあり、オデコのものなどは、殊更其處が目立つて見える。顏の正面はやら薄き方で、顎の處から忽にまた濃く際立てゝ、頸へ塗り下げる。襟足は、三本、二本または、扇形など好々に特別に白くつけると其餘地は、地色の儘で存してある。されば昔の化粧にては、元來色黒き人は、どこ迄も其黒いとは顯はれてゐたのである。昔は武家、町人乃至藝人ともに、婦人は左樣に化粧したものであつた。

然るに、今の婦人のお白粉などつけるは、地顏を塗り隱くして、奇麗に見せやうといふので、去かし此通りの考へでありながら、昔の婦人から見ると、お白粉の付けやうは、甚だ以て下手なり。天性黒い色のお方が、どうか色の白く見えるやうにとお白粉をお塗り遊ばす。處があまりお上手でないから、丸で燒山に霜が降つて、南瓜に粉が吹た樣にお見受け申すが多い。かやうなら愁ひ、地顏の儘で拜まして貰ふ方が、まだしも増である。西洋婦人は中々〳〵お白粉を塗付けるものであるさうなが、甚だ上手で、殊に衣裳の色合、晝夜の別、燈火の電氣か瓦斯か、または石油か、それ〳〵に應じて薄くも、濃くも、赤白いばかりでなく、薄紅梅の、ホンノリとした塗り方もするので、其技術に精神を籠め、巧妙を盡くすと、

まとに驚くべきものであるといふ。お化粧も爰迄こねばならぬ。昔の婦人がお白粉塗る中にも、チヤンとたしなみの廉を有つてゐたは、感心すべき沙汰であるが、時世の變化で、今の婦人は、其古風を學ぶといふ譯にも參らず。地顔の黒いが否やだからとて、塗りこくらるゝと、決して惡くはなし。隨分と上手にお化粧せらるゝがよし。しかし當節の樣に燒山霜的の流行は更々お免を蒙りたきものなり。

陳言一則

こたび、『大倭心』を、本誌に合併したるにつき、從來、『大倭心』にかゝげたる續稿を、本誌に連載せまくほりするも、紙面に限りあり、こと〲く掲載する能はざれば、小堀遠州、大和めぐり、など金玉の名篇にして、割愛せるもいと多し。そは、他日、別にすりまきとして世に出づることもあるべければ、見む人そのこゝろしたまへとぞ。三輪田眞佐子女史及び其他の人々の女教社に寄せられたる文どもはいづれも『大倭心』既載の續稿を、すき〲に、本誌にしるすのみならず、讀者の便にもとて、三輪田女史の『往時夢の如し』は、その首章より、更めて出すことゝはなしぬ。

女學雜誌編者申す

大和心

『大倭心』を『女學雜誌』に併すとにつきて

長井行

月のさがは、つねに、まどかなれども、盈缺の姿をげんじ、ほとけの性は、もと、泥洹那なれども、生死の跡をしめすといへり。物質は、不滅に、勢力は、常住なりとすれば、木の芽はる春の永日をたのしとして、もみぢちりしく秋の夕ぐれに涙ぐむも、ぶゆ、けいこにゝたる愚さなめり。聲は、無常なりとは、印度の正經なる學者だちのとるところなれども、聲論師に似たる説の、いまの泰西理學者のあひだに行はるゝもをかし。聲にし常住ならましかば、月の、つねに、まどかなるに似、佛の、つねに不生不滅なるに似て、われらの、一たび言葉をいだすも、なか〱に、價値あるものなりけらし。われらの『大倭心』を編纂し、毎月二回づゝすりまきとして、廣く女界の需用に應ぜまくほりせしは、いぬる九月の上旬にあり

き。そのゝち、日をふる、いまだ、久しからざるも、不幸やみがたきゆゑよしのありて、もはら社務を看るあたはねば、こたび、『女學雜誌』に合併し、卷中『大和心』てふ一欄を設けわれらが素懷をのぶるの地となし、『女學雜誌』と心をあはせ力をともにし、ひとしほこのみちのため盡すところあらまくほりす。そはひとり、われらの內にわだかまれる事情のこゝに至れるのみならず、また、勞をはぶきて功を倍するのみちならむかし。

ひと、あるはいはむ。『大倭心』は、和敬清寂なる本邦女道の精神をむねと鼓吹するものにして、『女學雜誌』の、もはら、世界日新の學術を奬勵するものと、その旨を異にし、且、一つは、佛敎的の傾向を有し、一つは、基督敎的の關係をたもつものにしあなれば、その合併こそ、あやしといふもあやしき限りなれど、そも、かくのごとき誤解は、一應、世の免かれがたきところにあなれど、われらの大和心てふもの、神道者流の偏僻にあらぬよしは、かのすりまきの第二號にもいへりき。漢くにのふみをまねびてこそ、大和心もいよ／＼、めでたかるべきよしは、『源氏物語』にも見えたり。いまのよに生れて、とつくにの文字しらぬは、目あれども、五彩をわきまへぬものとこそいへ。はた、基督敎の、佛敎と並び行なはれて、あひ悖らぬは、われらの、はじめより信ぜるところにして、基督といひ、佛陀となづけぬるも、要するに、東西路を異にして、同じき世界の平和を望み、同じき將來の光明を目あてに、兩端より、互にすゝみ來れるものにして、一時の路を異にせるがために、目的の同一に心つかぬは、愚なるわざなめり。それ、貞道とは今日、われらの口にするごとき狹隘なる意味にあらじ。なさけこもり、あはれみ深きを、女の道とのみ信ずるは、われらが機根の、いまだ純熟せざる過にして、メシア重到の日、彌勒再來の曉にいたりなば、人々みな牝馬の貞に安んじ、謙遜、和敬、不妬、不慳、今日女の道と、のみ思ひせるものは、これ人の全たき道、天の自然の則にして、夙に、罪障の淺からぬを懺悔せる女人の身こそ、第一に無上道に到りぬべき津筏を得たるものにあらずといふべからず。あはれ、このふみを愛讀せんずる諸孃、ふかく、難得の身をなげき、さかりに、菩提の大願をおこして、やまとごゝろ、いみじく、愛染せず、厭足せず、罣礙せず、

ひろく衆生を攝受し、人類の幸福をすゝめ、閻浮利の平和をたすけたまへかし。われらが『女學雜誌』の諸賢と講明せまくほりするもの、また、まことに、こゝにあるかな。

思ふことといはでぞ志のぶ世にもあらず
　つぼのいしぶみかきつくしてむ

往時夢の如し

三輪田眞佐子

その一

花の香は、今も昔に異ならず、月の色は、昔も今に變らざめれど、ひとり、紅顏の少年、つかのまに白頭の老者となりて、蓬萊山の草、更に益なきこそ世の恒なれば、あはれ、盛の花のちり行くよりも、滿つる月のかけそむるよりも、人の身ばかり、はかなきものはあらじ。されど、少年は、もとより、老者の感慨を知らざれば、徒に空想に醉ひ、同じく、末路の悔あるを免れず。老者は、既に世の辛酸をなめ盡して、心鐵の如くならむも、如何せん、日西山に傾きて、こを施すに猶豫なし。諺に、前車の倒るゝは後車の戒とかや。こたび、おのれに、幼き頃の回顧をものせよと。げに、少年のために、こよなう耳きことならむも、今更、往時を思へば、をさ〲夢の如し。ひたすら、月花の折々を聯想して、そこはかとなく、由なきことを書きつくれば、月の雫か、花の露か、袖を濕すことも少からぬなり。

その二

そも〱、幼きころ、最も、おのれの心を動しゝものは、春秋の花もみぢを始め、なべて、天地間の現象にこそありけれ。さて、わが國の古き文などには、春色秋光、いづれか勝ると論ひしもの多し。おのれも、今は、秋光こそ見どころ多かめれど、思ひ侍れど、幼き頃には、春色ぞめでたきものと思ひけるにや、三月のころ、野の邊に出でゝ、菜種の花の色香に迷ひて、霞がくれに飛ぶ蝶などを見て、家に歸るを忘れしこともありけり。さりとて、冬のころ雪軒をうづめ、あるは、霰窓を打つものから、成人たち、悉く火の傍に集ひて、むつ物語するに、風なひきその母の戒を忘れて、前栽に降り

たち、あたりの景色をながむるも、中々なりき。稍長じては、杜鵑の聲、あるは、蟲の音などを、あはれと感じぬ。その他何にまれ彼にまれ、耳に新しきもの、目に珍しきものに逢へば、殆、現心なかりしなり。思ふに、これ等は、智識を開達する源となり、わきて、志き島の道の材料となるものなれば、なるべく、幼き無我無心のころに、廣く四方の天然を見たらむには、文學には更なり、萬の理を悟るよすがとなるものをと、過ぎにし年月を惜むになむ。

その三

おのれ、十三四のころ、京都にありて、神山鳳陽翁の門に、春秋左氏傳の輪講あるを以て、これに加はらばやと行きけるが勿論女の身にしあれば、獨り行かむも如何はしきものから、一身の書生を具しけり。ある日、講を終へて歸るに臨み、この書生、玄關に待ち居りしが、忽、走りて、おのれの履子を調へけり。おのれ、何の心もなう、こを穿ちて歸りけるが、たま〳〵、その日、高橋武之翁、鳳陽翁を訪ひしを以て、以上の始末を見給ひけむ。數日の後、武之翁に逢ひけるに、翁は、かねて、おのれを、教へ子の如く導き給ふものなればにや、諭しけらく、女子は禮に厚きこそよけれ。たとひ、書生とは言ふものの、これに履子を正さしめて、一片の風情もなく穿つは、よろしからじ。論語に、和氣あるものは婉容ありと曰へり、誠に、故に首を垂れ、あるは、言葉を述べずとも、沈默無爲の中に、下を勞ふべしと。おのれ、げに、さる理なりと、痛く心に耻ぢけり。さればにや、今なほ、こを忘れざるものから、おのれの許に客ありて、こを門に送り、あるは、人を訪ひて門を去る毎に、けいしだに見れば、往時を追想して、冷汗、背をうるほすばかりにこそ。

その四

嘗て、母につれられて石山寺に詣でけるが、母、おのれに教へたまへるやう、汝は、女の子にしあれば、この寺につきて傳ふるよきことを告げむ。まことや、この寺はむかし、紫式部が上東門院に奉らばやと思ひ立ちて、源語を書き給ひし所なりしとぞ。なべてこの時代には、清少納言を始め、いみじき才媛、輩出したりしも、德操の正しきものは希なりしに、ひとり、式部は、世の濁流にも染まぬのみかは。かくなむ、めでたき文さへ書きける。信に、後の世の模範となるも

のかなと、おのれ、忽、式部を慕ふ心切なり。もし、今の世にも、かゝる君在さむには、おのれ、朝な夕な、従ひて學ばんものをと、幼心ながら、感慨なゝめならざりき。折しも、月いと清く、四方のながめ、さながら、塵の世の外にある心地こそしつれ。あはれ、このつきや、式部の、文かきなれし窓をも照しけむと、恍惚と空をながて、

いまもなほ心にうかぶみづぐきの
　あとをさやかにてらす月かな

と、三十あまり一字をよみて母に進めたれば、母は、汝も女德を守りて、學のわざを怠らざるこそ、わが願なれと答へ給ひけり。あはれ、母は、既に冥土の客となりぬ。おのれ、今は、五十路の坂を越ゆれども、いかでか、その折の敎を忘るべき。

その五

おのれの幼きころは、封建の世にしありけるをもて、人々武道を先にして、文事を後になしけり。従ひて、かよわき婦女どもは、ものゝ數とは思はれざるも勢にこそ。况して、當時の風習とて、女子の天地いと狹く、且つ無爲なりければ、女兒はあらずもがなとさへ、思ふものありき。さればにや、あ

る年なる秋の末つ方、たらちねの父母對坐して、四方山のことを談ひけるが、傍なるおのれを指して、若し、この女が男なりたらむには、行末かけて、幾そばくか、樂しからましものをと、失望の色見えて、暫し言の葉もなかりけり。おのれ、かゝる父母の心底を推しはかり、哀しさに堪へで、覺えず、聲あらゝげて泣きければ、さすがに父母も、あはれとやおぼしけん、反りて、おのれを慰めてけり。

この時より、おのれ、世の父母は、概ね、數多の男兒を、もつめれど、家の父母は、おのれの如き女兒一人なるを以て、定めて、心細くおぼしすらむ。いざ、力の及ばん限り、孝養をなし奉りつゝ、學の道にわけ入りて、父母を樂ましむるよしもがなと、心に誓ひけり。かくて、星霜を送るほどに、明治維新の萌を含み、世の物議起りしが、あはれ、おのれも男子なりせば、今こそ大義名分のある所に従ひて、邦家のために、力を盡し、父母の望を遂げしむべけれと、折にふれて、心緒を唐歌になんものしける。

四海紛々欲レ定難。誰歟爲レ國瀝ニ忠肝一。
女兒不レ管廟堂議。閑向ニ窓前一披レ史看。

凡そ、幼きころ感銘せしものは、深く、心にのこるものなれ

はにや。おのれの身、男子と生れざりしを悲むこと、つかのまも忘れずして、昔の物語などを讀み英雄豪傑などのことを見る毎に、忽ち、おのれが父母の心中を聯想し止まざりき。嘗て、軍馬の柳下に嘶くをきゝて、勇ましく思しものから、

　長堤十里柳陰清。　誰氏遊駒嘶㆓晩晴㆒。
　知ル汝沙場退㆑虜日。　鐵蹄一蹴駭㆓千兵㆒。

なほ、その頃なりき。長州邸火を放ちて、西京を退きけるが、祝融忽ち蔓延して、全市灰燼となりき。おのれも、女子に生れざりしならばと思ひ、筆をとりて、甲子七月十九日紀事なる一絶をつゞりけり。

　烈燄須與遍㆓市門㆒。　烟塵蔽㆑日暗㆓乾坤㆒。
　不㆑怪咸陽作㆓焦土㆒。　樓台回首即郊原。

以上の詩などは、固より、幼時の作にしあれば、極めて、拙けれど、往時を回顧する念頭に、浮べばこそ。

　その六

おのれの母なる人のいつくしみは、終始變らざりしかど、一層、心を動かしゝは、七八歳と覺ゆるころ、風邪の心地して、例よりも早く枕に就きけるが、折しも、その夜は北風窓を音づれ、霰さへ地を打つなるに、母なる人は、婢をも呼ばす父にも知らしめで、なほ、おのれの目を醒さんと恐れけむためにや、はと靜に寢室に入り、燭火もて、おのれの顏を照し見て、何事かを獨りごちつゝ、顏を撫でなど、その夜は、殆どまどろむことだになし給はざりけらし。その際、おのれは思ひけらく、これまで、母の情を露知らざりしは、こよなき罪にこそ、今よりは必ず母の命に違ふまじ、母の恩に報いなむと嬉しさあまりて、袂をしぼりけり。（つゞく）

文藝

作歌の要義

某なるもの、頃日中島歌子女史の門を叩て、作歌第一の要訣を尋るに當り、三四の問を發して、女史の之に答へられし其要旨即ち左の如し。因みにいふ女史はこれ桂園派の歌人八田知紀翁の門に出で、歌論自ら其流を汲む。

●初心の程の歌よむに、之を譬ふれば、造花を造らんとするが多し、姿こそよく整へ、美しさこそいみじけれ。されど造花は同じく造花にて、遂に死物なり。然かるに姿こそよくも整はざれ、美しさこそ尠けれ、されど生きたる花ならば生命あり。歌をよまんもの、生きたる花を造るの心ありたし、ゆめ造花を造るものとなるなかれ。

●歌を詠まんとするに當りての第一の誤りは、イザ歌よまんといふ格別の心を起すとなり。さるが故にサラ〳〵と詠めず、其歌といへば、これ亦實際に縁の遠きものとなり了るなり。人と話をなす時にて見れば、まとに情を盡くして殘りなく言語にいひ顯はさるゝものなるが、歌よまん折りも、話をなすときの心と少しも變らざらんがよし。かくてたやすく歌もよみえられ、よき歌も出來るなり。万葉の歌のよろしきは、話をなす樣に詠まれたるが故なり。

●事物の實際に遠ざからざるやうに心掛けて、歌を作れば、古人の糟粕を舐むるの譏りを免れて、斬新なるもの出來るべし。譬へば、菊の花に蝶の戯ぶれ遊ぶ處を詠まんとするに、よく其景色の實際に接しなば、朝露を帯びたる姿、夕露おけ

る樣、いづれ同じきものならざるを見ん。其處をよく締めて詠むべし。また之を見る人の心の樣も、昨日と今日と、必ずや同じからじ。其異なれる處を其儘によみ出すべし、歌は斷えず新しきもの詠まるゝなり。それ故自らは門生に題詠を課するにも、彼等の實際見聞するものゝ區域内に限れり。

●新古今は、上手が巧妙の業にて、一首の意味の成丈け文字の上にて解らぬやうにし、七分三分のかね合せて支えたる、輕業歌なり。初心のものゝ、其姿に倣はんは大の毒なり。手本とすべき撰集は、古今、拾遺、後拾遺の三代集なり。家集概して初心者の手本となすにはよろしからねど、桂園一枝、これはよき手本なり。山家集もまたよろし、扨て歌よまん者は、平素此等の歌集につきてよく、會得する處あるべし。歌詠む其場になりて、古人の歌など參照するは甚だよろしからず。また彼の『麓の塵』『うひまなび』などを用ゐるは、極めて惡ろし、かゝる本にたよれば、自然と歌は製造し得らるゝなり。然れどもさる者には、いつまでも實際を得たるまとの自分の歌はよみ得られぬなり。

●初心の人は一首の中に三つも四つもの景物をよみ入れんと

することと多きに、僅か三十一文字中にて、左樣に多くの景物の、いひ盡さるゝものにてはなし。歌は餘情を貴ぶものなれば、僅に一を擧げて、十を忍ばしむるといふやうにてゆかし。譬へば座敷の中に、煙草盆あり、茶碗あり、座布團あり、何あり彼ありと、其處に有るものを一々言ひ盡くさずとも、煙草盆を擧げて其餘のものゝ從つて共に在るべきを推せしむるやうにてありたし。

◉古への名歌を見るに、いづれも二の句にて活かしてあるが如し。どこともに締れるやうの歌はよろしからず、また綏の歌の緩急の釣合よく心得べし。彼の僧正遍昭の歌の

たらちねはかゝれとてしもうばたまの
わが黒髪はなでずやありけん

とあるを見るに、一二四五の句いづれ強き言葉なる内に、三の句に於てうばたまのと冠辭のゆるやかなる語を用ゐて、休めたるは、一首中の大事なる處なり。此邊の事よく味ふべきなり。

◉歌は三十一文字にて事足りぬべし。強ちに長歌よまんとするには及ばじ、我師八田知紀翁は、專ら長歌に妙を得んものとて、香川桂園翁に師事せられしに、桂園翁戒めて、歌は三十一文字にて十分なり、長歌よむまでの要はなし。且つや短歌に長じて後にこそ、長歌はあるべきものなれといはれければ、八田翁も翻然志を改めて、さしも執心深かりし長歌を棄てゝ、短歌を專らにせられしとかや。今樣は趣きの變りたるものなれば、門生にも詠ましむるなり。旋頭歌に至りては、少しく字數の多き、(旋頭歌は三十八字)より、言ひまはしのやさしき故、これに讀みなるれば短歌が出來ぬやうになるの恐れある故、門生の爲めに取らず。

◉歌に新しき語を挿むと可なり。併し新語を用ゐずとも、他に歌詞たるに適したる、同義の語あるに、之を措きて、彼を用ゐんと不可なり、譬へばイタリア、フランスなどいふは、他にいひ樣もなければ、それにてよけれど、朝鮮、台灣などと殊更に耳たつ言葉はいはでも、他に鷄の林または高砂島といふ言葉のあるとなれば、其れをば用うべきなり。

三百六十日、　日々醉如レ泥、　李白
雖レ爲ニ李白婦一、　何異ニ太常妻一。

花圃の千草

菊盛　荒井みな子

そめゐなる菊は此ころ盛りとてきくより早く行まほしけれ

古寺鐘　おなじく

あれはてゝかたぶき立る古寺も鐘うつ時はたがへざりけり

猿　おなじく

をしふれば舞ふ山ざるぞめづらしき獸におとる人も有世に

時計　おなじく

更けぬれば人靜まりて時をしる針の進の音のみぞする

海上月　櫻井鏸子

袖が浦こぎ行舟にさす月のみにしむ頃になりにけるかな

父に別れけるとしに

風前荻といふことを題にて　湯淺節子

秋風は荻の上葉に立初めぬかへらぬ人をおもふゆふべに

同じとし月を見るといふことを題にて　おなじく

いつみてもかはらぬものを秋の月ことし斗に悲しきはなし

夕霧　成瀨むつ子

あし引の山の梢もみる〱に霧に成りゆく秋の夕ぐれ

竹間月　おなじく

茂り合まどのくれ竹吹く風にそよけばもるゝ月のさやけさ

朝顔

寐やのとをあくるおそしと朝まだき咲きそろひたり朝顔の花

越後なる人の許より

文おくりければ　兒島櫻子

濱千鳥あとうるはしき文を見てとび立ばかりわれぞうれしき

歌のいろ〱　花圃撰

故郷鹿　田邊實子

古へをたれも哀れとしのぶらむ年ふるさとの小男鹿の聲

寄菊祝　田村家壽子

よろづ世に榮えむ宿の色みえてにほふ籬のしら菊のはな

同　秋月胤子

下露をくみてよはひをのぶるてふためし思ひて植る白きく

同　　加茂よの子

くがねなし志ろかねなせる菊の花きほふを見ば君とめるかも

旅にある妻をおもひて　　なにがし

志きたへの枕にかよふおもかげは妹がかどての姿なりけり

山家紅葉　　行友常子

賤が家の軒端にそむるもみぢ葉の深き心をしる人やたれ

旅路鹿　　おなじく

ゆきくれてやどり求めむ便なくなやむ野末に鹿の音ぞする

露　　おなじく

よひ〳〵に物の哀れやあつむらむあしたの原ぞ露けかりける

秋山家　　おなじく

山里は月のひかりもさびしきに妻こふ鹿の聲ぞ聞ゆる

ふしわびて月にうかるゝ道のべの　　定家
かきねの竹をはらふ秋かぜ

問答

人情を知る方法につきて問

を寄せたる人のありて曰く、兎角に人さまの心の知りがたき爲め、思はぬ不躾をいたし、又た思ふ丈けの眞心を通ずるとも出來ず、口惜しき事のみに候、必竟は人情と云ふものを知らぬ故の過ちぞと氣付き候へども、扨て其の人情を知らんとすると亦た容易ならぬを覺え候ふ。あはれ良き教のましまさんに、導かせ玉へとなり。

答て曰く

乃はち是れ學問の學問たる所なれば、勉學と工夫とを積むの外なし。一日にして頓悟するなど、無雜作の方便はあるまじきと勿論ながら、茲に何人も今日より直ちに行ひ得べき有益の方法あり。其の効能抜群なるにも拘はらず、人々實際に試ろみざるが故に、ハタと忘却せらるるもの也。よつて其を語りてお答へとせんに、他なし、俗に所謂る

我身つねりて人の痛さを知る

と云ふこと、是れ也。人に嫌な顔をせられた時、我は如何に感ずる乎。人に不愛想の取扱ひを受けし時、我は如何に感ずる乎。一言の言ひかた次第にて、納得することもあり、不平の事もあり、感激することもあり、遺恨骨髄に徹することあり、其の一々吾が經驗を考ふれば、他人が如何に思ふかの人情は歴々として推察することを得べし。即ち、我心に映る實踐の感覺を推し及ぼして人の情感を察するの工夫こそ、直ちに以て人情を學ぶの早路なれ。然るに、人は兎角此の早路につかず、ことさらに遠路を迂回して世の人情を知らんとする故、久しうして尚ほ覺とる所なき也。通常、人が他人に對する時は、吾が理想を掲げて之をもて判斷せんとす、故に言ふ所常に人情と合はず。例へば、もし些細なることにて、他人が不平など言ふときは、忽まち吾が理想の鏡を照らして之を冷酷に審判し、左程の小きことにて不平を言ふと云ふことがあるもの乎と即ち、「ことがあるもの乎」と云ふ倫理の規則によりて擯斥するなり。さすれば、其人の不平は馬鹿らしき事の樣に思はれて輕蔑の心起り、たゞ之を罵るの外なかる可し。斯ては則ち人情と云ふものは、一切分らず、只だ理想と道理とを以て人を裁判する迂遠冷淡の人となるべき耳。然し乍ら、篤と自から考ふべし、如何に公平大量を期圖する吾自身にても、いと些細の事に激して憤懣し、あとにて思へば馬鹿々々しきほどの小事をも大層の事の樣に感ずるものあるならずや。我すでに斯く感ずるとせば、人亦た左樣に感ずるなるべし、即ち是れ常識の在る所、人情の存する所なれば、人情を知るとは、他なし、我身を引くらべて感ずるてふ此の實踐の工夫にあること也。然るに、本ばかり讀み居る人々は、平素、書中の理想の人物に接し、吾が心に畫くとも空想ばかりなれば、所謂る我身をつねることもなければ、隨つて人の痛さを知ることもなく、斯て次第に人情に遠ざかりゆくなり。ユーゴーが『ミゼラブル』と云ふ小説に、「モッシユル」シリエルと云ふ稀代の聖僧あり。殆んど人間ならぬ程の徳行も多き中に、わが説法する擯死の亂暴ものが、我名を聞きて驚かぬ不敵の無禮を見て、「コイツ、生意氣ナ」と、フト思ひたる刹那の惡感情をよくも寫したる所あり。人情の秘訣は即ち玆にあり、如何に清僧にても、卑劣の負けぬ氣を起すこともあり、

又如何なる大凶惡も、我を忘れて人を助けんとする善心の發作はあり。此の矛盾の如き、僞善の如き、譯の分らぬ、調子の揃はぬ所ろあるが即ち、人情の眞面目なり。然るを、小さき哲學が、植木屋の樹枝をきりつめて頭を揃へる樣に、百般の人事を小規模の組織の中に入れると同じく、本讀みは、其の矛盾の所を揃へて、調ひたる規則の中にはめ込み、八犬傳の犬士の如く、善きものは、何處迄も善しと云ふやうに思へばこそ、人情は遂に分らぬとなるものなれ。人情を知るの法、他なし。先づ自から省りみて篤と我が弱點を知り悉すにあり、左らば、思ひ遣りも、勘辨も、辛棒も、自づから續々として出で來らん。

講義

米の話

若年寄

をちこちのしつがたか垣うつもれぬ
千町のをしねかりてほす頃　千蔭

秋は收なりといふて、秋の門田に稻刈る時節は、軈て今時じや。丁度よき折からの事故、少しく米の事に就いて、數箇條の談話をば致さう。

偖て〳〵天然の排置作用といふ者は、實に奇妙不可思議なものよ。時節柄の栗や柿やに就いて、面白い話があるが、それは、他の人が既に別項に書いたから、それを見たがよろしい。木の實の事もそれだが、花などの殊更巧妙に出來てをると、一一茲で云つては居れぬが、手近い話をしやうなら、蝶媒花、蜂媒花などいつて、蝶や蜂を呼び寄せて、生殖の媒助をして貰ふやうな花は、花瓣の色も形ちも立派であり、また花中に蜜を貯へてをる。處が生殖の機能が濟んで、まう蝶蜂が來いでもよい時分には蜜がなくなるのみか、中には初め紫色であつたものが藍色に變り、赤色であつたものが藍色に變り、黄色であつたのが、白色になる花もあつて、色の變つたは、即ち蟲類に蜜が盡きたぞ、もう御出で被下れなくてもよろしいと相圖する印なのである。又暮合夜に開く花に、紅や紫の色はなくてみな色が白か淡黃だかといふと、蟲が暗い中でもよく見付けうるが爲である。然るに風媒花といつて風の媒助

で生殖をするものは、花粉が輕くつてよく風に飛ぶやうに出來てゐて、しかも澤山にある。禾本科などの花どもは、即ち此類だ。米は禾本科の植物で、面白い事には、其花は、晴天の時にはクワッと開いて、風の媒助を俟ッてゐるが、雨降りには蕾んでをる。處が日が晴ッてゐて雨が降る、即ち狐嫁入には、稻の花は欺かれて開いてゐる、さういふ時に生殖すると粃米が出來る。狐嫁入の多い年は粃米の量が多い。斯樣な有樣であるからして、なんでも日和の朗かな日を見計つて、人工で生殖を媒助したならば、作得も增さうかといふ考へからして、

津田仙氏は

和蘭のホーイブレンクといふ人に習ふて津田繩といふものを發明せられた。之は繩に羊毛を付けたもので、其羊毛へ蜜を塗ので、田の向ふと此方らとで引ッ張り。稻の頭を擦るといふ仕掛で、道理は十分にある。處が實驗上此方法を施した田の作得は僅かしか增加せぬのに、津田繩の代から勞力の費えから勘定すると、餘り餘計の益かないので、流行なかつた。早稻を植うる時候は、冬至（十二月中）より百三十日餘で、中手を舊五月の節に植ゑ、奥手を夏至（六月中）の前後に植ゑ終るは、先づ大方の定めであるが、土地の季候の寒暖によつて、五日十日の差異はある。早苗を植ゑてからは、七八十日目に穗が出、扨て又それから早稻は三十日、中手奥手は四五十日で刈しほになるものじや。諺に稻は柳に生ずとあつて、楊柳の榮える年は、得て出來秋がよいものじやさうな。また梅田、枇杷麥ともいつて、梅のよく實る年は稻作がよく、枇杷の多くなる歲は麥作がよいとの事で、左樣な言傳へは、經驗上大低實際にたがはぬとのこと。

大和の國の老農の

中村直三といふ人、此人は先年身まかられたが、至つて稻作の事に老練でして、米粒を一寸嚙んで見ても、此米は肥料に何を用ゐたか、かを用ゐたかと、言ひ當てる程であつたが、秋田縣で或時此人を招待して、稻作改良の事を依托した處が、丸で失敗した。これは全く大和の國で經驗した其まゝを、風土季候の異なつた秋田に施したからのことであつた。

林遠里といふ老農の

稻作改良法は、何れの國でも試驗してゐるが、此人の方法に

よると、作得が必ず多い、なぜ左樣かといふに、通常、人は稻をば水草だと考へて居るのに、此人は稻は水を好む陸草だと認めて、僅かの思ひやりの違ひで、稻に水を引いては、時〳〵落して、根を太陽の光線に當てる。夫故作得が增加する次第であるさうな。

扨て話は少し脇道に外づれるが、我々御互ひに、毎日かうやつて、米の御蔭で生きてゐるが、しかし其米は、何處の國で出來たものか、米屋が先日入れた米と、後日入れた米と、同じ所の產であるか、イヤ〳〵一ッ茶碗の中のお飯は、一ッ田の米であるかどうか、其邊の事は誰も考へて食べるものはあるまいが、それをしらべて見るとまた面白い。東京で調査して見るに（榊順次郎氏著『脚氣病と米との原因上關係』による）東海道米、三陸米、兩羽米、北國米、磐城岩代米、大上米、（畿內、中國、四國、九州の米を總括していふ）、地廻米、（東京近傍の產）の數種が、一年間には總計二三百萬俵も輸入されるので、其米の中の七分は一旦深川の東京廻米問屋の手にかかつて、三十餘軒の問屋の倉に納まつた後、數十俵數百俵宛と、市內二百五十軒餘の米穀問屋の手に渡り、其處からまた少しつゝ二千軒餘の白米商に渡ると、其白米商は、優劣樣々なる各地產の米をいゝ工合に混ぜ、白米に精げ、上中下の等級を附けて、家々の臺處へ納まつて、各々の口に這入る。米穀問屋白米商などは、また直き〳〵に地廻米を買込むこともある、其高は、全輸入額の三分に當つてをるといふことだ。又以上數種の米の外にいやな臭のする支那米、また朝鮮米も印度米も多少輸入せられてゐる。

何月頃何地產の米を食ふことが多いかといふに、精細には分らぬが、暑氣の候には、兩羽米、北國米がきまつて多く輸入されるで、市民のこれを食することも多ほいのである。其處で產科醫で名高き榊順次郎先生は、脚氣の原因が米に關係してゐるに相違ない、脚氣は暑い時分に多い、されば其頃需用の多い米が此病氣を起すに關係してゐるであらうといふ御考へから、いろ〳〵取調べられて、兩羽米並に北國米（特に越後米）は脚氣病の原因をなしてをると論ぜられた。また東海道米の需用もまた同病に關係してゐることを推究せられた。其れ等の研究は、前方一寸云つた書物に委しく見えてゐて、頗る有益なものである。米の中には黴の生たり、虫がわくことがある

が、此等は至つて毒になるものであるとの事で、榊先生は、脚氣病の原因は濕分多き米穀に、温濕の幇助あるに乘して、黴菌寄生するに因りて、醸成したる有毒成分の中毒に在りとまで斷定せられた。甚だ恐しく、よつて頗る注意すべき次第にてあるまじきか。

はるかなる田面のをしねなす雲の
　立さかえたる御代の秋かな　　爲家

訪問

クラヽ、パリッシユ嬢を訪ふ
(Miss Clara Parrish)

かもめ

萬國婦人矯風會第七回世界巡回遊説員クラヽ、パリッシユ嬢去月十九日を以て來朝せらる。同孃には既に九月二十二日を以て來朝あるべきの豫定なりしに、途次布哇にて熱病に罹られしが爲め、三旬を後れて爰に我邦に歡迎するとなれりしなり。由て記者頃日同孃を築地十三番館スペンサー女史の邸に訪ひて、其温容に接し、しばらく言葉を交ふるの幸榮を得たり。

巾幗の女流、稱するに世界巡回遊説員たるを以てす。さればたゞに其名を聞くのみならんときは、いかばかり猛けしき女丈夫なるかと疑はるゝに、親しく之と接すれば、孃は眞に温雅柔和の淑女なり。其名のいみじきと、其人のやさしきと、相たくらべて、一見ゆかしさの思ひに堪へざりき。

◉先づ問ふ、我國には如何程御滯在の御見込みに候や。

○されば候、何程と定まり居り候はねど、働きの都合宜しき限りは滯在いたしたく、先づ二年間も滯在いたすべきか。

◉御働きの方法は如何にて候や。

○日本全國を巡遊して、既設の矯風會を奬勵し、いまだ之れあらざる地方には、新に設立いたす樣になしたく、目下は、主意書起草中にて、出來上り次第、運動を始むべく候。御國の婦人は、妾が運動を受け入れ候べきや。

◉必ず喜んで受け入れ申すべしと存じ候。

○既に所々より案内狀を受け、十一月四日には大隈伯爵邸内にて歡迎會を開き被下るとの事にて、喜ばしく存じ候。先日

既に横濱海岸教會にて演説いたし、其節米國々歌を歌はれしには、妾は泣き出さんばかりにも嬉しく候ひき。大隈伯爵の御邸内は、庭園が立派にてあるとの事にて候はずや。

◉左樣に承はり申し候。扨て上流婦人社會には、御運動なさる御考案にて候や。

○まことに希望の至りに候へども、如何せば其途の開け候べきかを知らず。よろしき方法あらば、お示しありたく候。

◉先づ各大臣に御面會致されんと、然るべくと存じ候。前伊藤侯内閣の時分には、人心皆な倦み厭きてゐ候ひしが、新内閣の組織と共に、人心やゝ活動しはじめ、何事か新しきものを得て、進まんとする時節にて候へば、御運動の便利尠なからず。殊に新大臣方は、いづれも接客を喜ばれ候べければ、幸ひ大隈伯爵邸にて、歡迎會も有之とに候へば、其後にて、第一に大隈伯に御面會いたされ候て、同伯の紹介を以て松方伯はじめ、餘の大臣に御面會いたされて然るべきかと存じ申し候。



○御示しの事、實に難有く候。其方法實に策の宜しきものと覺え候へば、其方に取り計らひ度候。

◉レビット夫人は目下如何被遊居り候や。

○同夫人は曩に世界巡回の途次支那にて熱病に罹られ候ひし以來、兎角身躰健やかならず、目下は亞米利加に住居にて候。

◉ウイラード女史は、如何の御樣子にて候や。

○ウイラード女史も兎角身躰すぐれず、夏中は歐洲に御坐候ひしが、目下は亞米利加にて、十月にはセント、ルイス市開會の婦人矯風大會に會長として臨まれ候。

◉ウイラード女史には、日本に御來遊あるべきか。

○ソモルセット夫人と共々に御來遊あるべき筈に有之候。ソモルセット夫人は、非常の財産家にて候へば、同夫人は一艘の滊船を新造なし、兩女史同志を卒ゐ、之に乘じて、世界遊說の途に上らるべき考案に候。いよ〳〵其事となれば、纜を

桑港に解きて、第一に日本に來らるべく候。また假令不幸にして、ウイラード女史其雄志を果すと能はざらんには、ソモルセット夫人ひとり自ら衆を卒ゐて、其志を繼がるべく候。其時の來り候まで、準備よろしく整へおかんとは、即ち妾が這般巡回の任務と覺え申候。

談話一時間餘に渉りて、猶樣々の雜談を試みたる後、再會を約して辭去す。歸來孃が温容なほ顔前に髣髴たるを覺ゆ。

縫ものに針のこぼるゝ鶉かな　千代

兒藍

ばけ井　さち子

於絹は近所中て評判の器量よしでした。天鵞絨の樣なつやつやした、かみの毛をたつぷりと襟元できり揃へ、前の切さげの下からはパッチリとした冷しい目、高い鼻、可愛らしい口、揃ひもそろつて行儀よくゐなほり、ほんとに奇麗な娘なのでした。「於絹さんの奇麗だ事、いまに大きくなつたらどんなだらふ」と家の人、そとのひと寄るとさわると、賛め立てました。斯う云ふ事と云ふものはえて耳の大毒だから、さう五月蠅く云つて聞かせなくつても宜いものを、まだ八歳と云ふ小娘の癖に一日中閑さへあれば、鏡とくびッ引き、頭をなでたり、顔をさすッたり、帶をいぢつたり、何時の間にか、奇妙な樣子をして見たり、ツーンとすます事を覺えたり、年に似付ぬシヤレ娘となりました。

おきぬは此頃お母さんに連れられて、田舍の親類の家に遊びに行きましたが、都からの珍らしい御客樣とて、親類の小供等がもてなし振りに此處の山あすこの林と、花を集めに栗拾ひにと連れあるきました。始めのうちは田舍なれぬ面白さに、何處とも云はず一緒になつて飛びあるきましたが、日なた遊びの恐ろしき報いには何時の間にやら、於絹のそれは〳〵大切な奇麗なお顔が、日にやけました。始めてさうと氣の付た時の於絹の後悔、飛んでもない事をしたと思つても、今となつてはどうともならず、これからはもう外へ出る事は決してしまいと。固く心に決めました。

翌日になると今日は八幡林に栗拾ひと云ふ小供等の切望で、朝早くより騒ぎ立てました。おきぬは「今日は私はお留守居するの」と云つたぎり、何と云ふても動きません。

ナゼ、何が怖いの、何にも出て來やしないわ。

とすかされても笑はれても、おきぬは只、

今日は行かないの

ソレジヤ今日はお絹さんを置いて行かう。今に淋しくなつたら遊びにおいで、向ふに見えるあの森の中にゐるからね』

と小供等は皆出掛けて仕舞ました。後はシーンとして臺所の方から、糸ひく音がビン〳〵と聞ゆるばつかり、相手はなし、爲る事は無し、退屈で淋しくつて堪へられなくなりましたものだから、何と云つてもよう〳〵八歳の娘の子。

一寸行つて皆が何をして居るか見てこやう。

と反圃道を眞直に森の方へと出掛ました。餘程行つてはや森近くなる所に静な池がありまして、其中から奇麗な蓮花が咲いて居るのを目付て、お絹は、

あの花を一つ取つて行かう。

と云ひながら池の方へ行つて、花を取らう身を屈めますと、目に止まつたのは、池面にうつツた自分の姿です。これは思ひ掛けない所でお目にかゝつて嬉しいと、花の事はすつかり忘れて、例の樣になでさすりを始めました。ところがどうしたはづみか、足が滑べつてペッサリと水の音、なんだか目舞がして變だと思つて居ると、自分のまはりから水泡がブク〳〵と出て來ました。

スルト泡が破れて、中から、指より少さい小人がぞろ〳〵と出て來て、お絹の手取り足取り、下の方へズル〳〵と引張り込みました。暫くたつて目をあけて見ましたら、自分はまだ見た事もない奇妙な美しい處に、大勢の騒がしい小人等に圍まれて居りました。小人等はお絹の來たのが嬉しいものと見え、寄つてたかつていろ〳〵もてなしました。切角來た序だから、方々を見物して往つたらよからうと云ふので、大勢のものが後になり、先きになり、奇麗な小石でしきつめた道を通つて、あちこちと引き廻しました。そのうちお絹の目に留まつたのは、庭の片隅にあつた三ツの井です。お絹は傍に居た豆の樣に、丸く肥つた小人に向つて、

あの井は何の爲めです。

と尋ねましたら、腹を抱へて今にも轉がるかと思ふ樣に、ゲタ〳〵笑つて、

アリヤ妖井ですよ。

妖井つて何に、何がは入ているの。

覗いて御覽なハヽ、、、、、

お絹は早速のぞいて見ましたら、見えたものは珍らしくもない自分の顔でした。

アレ此井は私の家にある鏡と同しだわ。私の顔が寫つて居るもの。

奇麗な顔ですなへヽ、、、サアこん度は二番目のを覗いて御覽、あなたが外の人の樣に見えるお顔がうつるから。』

今度見えたのは確かに自分の顔には相違ないが、どうした譯だか、奇妙に憎々しく可愛らしい處がありません。こんな顔なら餘り奇麗でもないなと心で思つて、顔が何だか熱くなつて來ました。

サア今度はこれだ。覗いて御覽、あなたの正味なお顔が見えるから。

と云はれて、お絹は心なげに、のぞき込みました。これはどうした姿でしよう。目がつり上つて鼻ばかり高く、顔ぢゆう鼻ばつかりかと思へる樣な、ほんとに見ともない顔で、其めぐりにハツキリと『器量自慢見つともない』とかいてありました。

お絹の顔は燃ゆる樣です。身振ひして我知らず後へ退がりました。小人等は猶もガヤ〳〵、サア是からゆつくり休んで、それから歸るが善からう。とお絹を連れて一つのお坐敷へ通しました。美しい貝と苔との座ぶとんの上に、お絹を坐らせて、珍しき貝の志らべや、面白き小人踊を見せました。

やがて一人の小人が立つてお別れの言葉を陳べました。

只今お別れ申すに付ては、今私が一同にかはつてお禮を申しまた一言申上て置きたい事があります。今日あなたが思ひ掛けなくも、私共の住居をお尋ねくだすつた事、一同が深くよろこび、また謝する處であります。付ては御好意御禮のお印として、何か御土産を差上たきなれど、殘念な事には私共の持つて居る寶物は、此處でこそ御覽の通りに光り輝け、御宅へ持ち歸られては一文の價なきものであります。これは一同が深く遺憾とする處です。止むを得ず茲に勝手がましきお

願ひを申上て、お別れを惜みたく存じます。それは別義にあらず、どうか御歸宅の後はあの御家のうらの松の木の下に生へて居る優しく可愛き、菫草を、御訪ね下され。之を取つて常に御愛讀の御本の中へお入れなされて、それを見る度毎に私共の事や、茲に御覽なされた事を、思ひだして戴たいと云ふ、この一言を以て只今お別れを告げます。

と長演說を終りますと、一同拍手してお絹のまはりに集り、手にすがり袖につかまり、異口同音にサヨーナラ、サヨーナラ。

お絹はフト目をあいて見ましたら、自分の廻りにはお父さんをはじめ、おつかさん、おばさん、おぢさん、お醫者さんまでが立ちならんで居りました。

お絹は池へおつこつて暫らく正氣を失なひ、いまよう〱氣が付いたのでした。之より四五日にして、お絹は全快しましたが、あの時池の中で見た三つの妖井のいつまでも忘れられず、其後は誠にあどけない可愛い娘となり、昔に幾倍勝る美しい子供となりました。

また開ぬ心はいかに窓の月　はせを

雑録

女禮談

記者屢〻禮道に明らけき、某老女史に就きて、其初めて禮を學ばれたる以來、人に之を敎へらるゝとも既に多年なる今日に至るまでの經驗に聞き、また其自ら禮の要と悟られをらるゝ節々を尋ぬるとあり。斯道に心懸けんものゝ敎へとなるべきとのいと多ければ、今爰に女史の親ら、記者の爲めに記し玉へるものを先づ掲げつ、なほ口づから聞かせられし事々の、之に洩れたるをば、補綴して後に附述するになん。

◉凡そ一日の內の起居步行は、幾度と數も限りなきとなれども、おのれの曩に小笠原家の門に出入して、初めて諸禮の道を習ふに至りしや、立つとのつらく、座するとの難かりしは、中々口にも筆にも及ばぬ程にこそ。されど一日二日と受業の

數も重なりぬれば、一二ヶ月が内には、よう〳〵苦しさ、つらさも薄らぎ行くと共に、科目の漸々に難き方に進みもてゆき、是迄は、起居歩行の事のみにてありしものが、物品をも取扱ふやうになりければ、やゝ安樂に覺えつる、起居歩行の身に添はずなり、更にも亦新しき苦勞を覺えき。物品の方に心を用うれば、起居進退が忽になり、起居進退に意を注げば、手に持てる物品は、横に傾ぶくなど、爰に於てか、今日までの稽古も何の用かと喞たれき。先生のまた常々重き品は輕く、輕き品は重く扱へよと敎へらるゝをば、よく心に銘してはありながら、形の上にはさやうに參らず。併し是も亦二三ヶ月立つが中に、苦しさの程も少なく覺ゆるに至りたり。』

◉敎場に出づる度毎に、形ちさへ先づ覺えさへすれば、凡そ何十科目と多きが中にて、一つ或は二ッ宛の進歩あるが樂しみにて、風雨の日も厭ひなく、敎場に登り、一日の勉强不出來にて、先へ進み難き時は、何となく心安からず、不愉快なりき。稽古の數もやゝ重なり、相弟子とともに、式を演じなどあるやうになりては、他に劣らじ、負けじとの氣魂に勵まされて、一日の休業もまことに本意なかりき。其時分恰も東京府下の學校に、女禮科を設けらるゝにつき、學務課の役人または處々の學校の敎員など、參觀に參らるゝこと度々なりしが、さる時丁度己が演習の折にもあらんには、他人に傍觀せらるゝとの耻かしきに、いとゞ氣のつまるとにてありしが、後にはこれまた、參觀人ならば猶よし、兄弟弟子なりと、見物し居るは、却て張合よく、身躰の働きも勢ひつきてぞ覺えし。其程にもなりたれば、參觀人の有りて、外の人々の何かの業して、御覽に入るゝとき、アゝではなし、此の所は斯樣にしたらんが宜しきになどゝ、竊に心付く節の認め得らるゝに至りけり。それよりなほも進みて、四人、六人と相手のいる式をも學ぶに、さるとき、同じ程に業の出來得ぬ人を相手にするは、實に骨折の多く、起居歩行進退の早き人もあり、遲き人も有りて、中々に加減宜しく滯りなきと能ず。其早き人には、餘程手廻しをよくせねばならず、其遲き人には又夫相應の計らひあるべくして、氣のもめると大方ならざりけり。

●程經てはまた、おのが業をなすに、傍らに人の有無に、少しも頓着せぬやうになりき。されば自ら業の進境のやゝ著しきを覺ゆるにも至りけれど、先生の事々にゆるしなくて、叱正せらるゝとの實にも困難なりき。初めの程は科目の進歩するを、樂しみとせしに、今に至りては、少しく苦勞の安らげば、又外の科目に移りて苦勞を生じ、これにては、いと困難なるゆゑに、先へ進まぬやうにして貰ひたしなどゝ思ひもしたりき。其より又後には、おのが業は、かく迄に拙きに、なにとて先生は能々正しては給はらぬかやと悲しく、其旨先生に申すに、先生はたゞ笑ひ給ひて、左様には非ず、凡そ法といひ、業といひ、術といひ、此等は師として及ぶかぎり、力を盡くして敎授すれども、禮の至妙は、己れ自ら修練感得するにあらざるよりは、師も亦如何ともする能はずと申されたり。いよ〳〵練習するにしたがひ、相手を撰ぶ事もなく、上手の人と相方になりて演習すれば、さながら水の流るゝが如くに、滯るとなく、三四時間の時を要するものも、直ぐ〳〵と順序よく整ひ、又下手なる人と相方になるときは、良き程に調子を合せて、塲の白けぬやうに繕ひ、己れ一人のみ上手めかさずして、相手の業の巧拙に従がひて、たち振舞ふやうに心がけ、十疊の間なれば十疊、三十疊は三十疊、二疊は二疊だけに、大にも小にも、躰をつかふ事の妙を覺えぬ。

●初心の程は、意餘りて躰働かず、禮の形式に精神を使はれたりしが、後に至りては、禮式を己れが使ふやうになれり。禮義三百威儀三千とか申して、しかく多くの式作法あるに、此等は迚ても一々記臆の出來得べきものに非ず。詮ずる處、精神の發して禮の姿となり、千差萬別の間に、たゞ一ツ平和自然にして、時と處と位とによりて、其よろしきを得るとを知らんか。さらば如何なる塲處に遭遇いたせばとて、物に驚かず、事に臆せず、安んじて之に處するに輕々しからず、恁てこそ禮の要を得たりとはいふべけれ。

●禮の式を行ふに、黒人見の上手あり、素人見の上手あり。起ち居振舞の枝葉に至りては、人々の嗜好に従ひて滿足さする事も出來べきなれど、凡そ初心の程には、上手のものにても、なす業に禮式らしき處あり、また下手のものなれば、實に見苦し。併し禮の要は、人の目に上手に振舞ふとも、禮式を行ふとも見えぬやう、人の心にとまらぬやうに圓滿なるこ

そよけれ。禮の禮式らしきは、いまだ禮の精神を感得せざるとのためしなるべきか。されど如斯く語らんと、こは銘々のたしなみの事にて、教場にて人に教授するには、作法の守るべきは、何處までも守り、禮式に叶ふとは、飽くまでも大切にきまりよく、其人々にしたがひて教へ、禮は形ちに非ずなど、先づ理によりて、形ちを忘れしむるの誤りに陥らしめぬやう心懸くるこそ肝要なれ。

◉女禮は昔風なり、あまりに堅苦しなどゝ思はん人も有るべけれども、難くるしきよりして、やさしきに移るは易く、通俗に間に合ふやう教へんには、たゞ夫れまでの物となりて、到底禮の精神等は得らるべしとも覺えず。また禮は下々のものには、あまりに其用無きとのやうにいふものもあれど、これも亦あやまりなるべし。如何なる片田舎に潜めるも、果たまたあはれなる破れ疊の家に住はんにも、人の身の禮の心あらんには、豈に美しからずや。況んや然るべき上流社會に生ひ立ち給ふ人々の、万一禮のたしなみのおろそかならんには、實に恥ぢとすべき事にこそ。されば凡そ學ぶべき折の有る時に、無用の事として之を打捨てゝ顧みざるは、淺間しきかぎりにて、自らも亦後に至りて之を悔るなるべし。

○禮式稽古の時、傍に人の有るなしに拘らず、己れは斷えず、王侯貴人の面前に在るの思ひを忘れざるなり。時間の長く要せらるゝ式を演ずる時など、己れの出づべき順番の來るをば、退き坐して待つ程に、勞れたるまゝに居睡の致したくなり、または執り行はれつゝある式の方へ、傍目を使ひたくなるものなれど、眞に貴人の前に出でたらん折りには、決してさるとの出來得べきものならねば、己れは頭を下げ、傍目使ひなどせず、心をゆるめず、正しく坐して、番の至るを俟つとに心掛けたり。

○初心の人を教ふるとき、第一に、坐れるものに、立つて御覽なされといふに、誰一人立ち得るものなし。起居は日常の業なるに、爰に至りて如斯きは、即ちいざ禮式を習ふといふが故に、ドコより立ち初むべきものかを知らざるなり。立つとを知らざる其人は、現在坐しては居ながら、禮式に叶ふたる坐容を知らざるなり。偖てやうやく立つこと、歩くとの出來るも、まだ眼の標點がつかぬ故に、足元がヒヨロ／＼するなり。斯くて二ヶ月計りも學べば、

言ふと言はざるとを問はず、誰れにても禮法は大概分りたり、とはいと容易きものと思ふ故に、さらばとて、段々と堅くるしき事を敎ふれば、禮法は實に難きものなりといひ、辛抱のしきれるもの至つて稀れなり。

○禮は精神の鍛練を第一とす。禮に達するとは、禮の己が心と伴ひ居り、たゞに式に臨むの時のみならず、日常の起居動作の万事に、禮を忘れず、單に法式に拘泥せず、時所位に應じて、よく變化するとなり。數十科目の法式ある中に、素より實用に適せず、古めかしく、馬鹿々々しきやうに思はるゝものあれども、一々之を學ぶは、克く禮道の鍛練をなし、彼達道の妙に至らしむる所以なり。さるを實用に適するとをのみ學べば足れりなどいふ人もあれど、こは禮が精神の鍛錬にてあるとを忘れたるが故なり。左樣の事にては、機に應じて變化するなどは決して能はじ。之を譬ふるに、禮を學ふは、猶ほ劍を習ふがごとし。劍を習ふものゝ幾十手の法を一々に錬磨するは、心を丹田に定め、機を見て能く變ずるの妙を鍛練せんとするが故なり。幾十手の法中、素より實用に遠きものはあるべし、よりて其實用に適するものゝみを學ばんか、然るときは、敵と戰ふに當り、さう打つて來ては、此方が受けられぬとはいはではなるまじき次第となならん。熨斗の折り方、水引の掛け方を習ふと同じ考にて、禮法を學ばんは、禮の要を知らざるもののとなり。

○禮法を習ふには、何年位かゝりますかと問はるゝと多し。此返答には眞に困る事にて、己れが助敎の許しを得たるまでには、前後通じて六年を要したれども、今いふが如くに、道の鍛練にてあれば、禮も亦一生の事業なるぞかし。

○又己れは力の至りて弱きものなれども、他の力强き人よりも優りて、却て重きものを持ち上げうるは、これ腰に力を入るゝが故なりと覺え、また己れ老いさらばひても、腰は前に屈らで、後に屈るべし、これも禮法の德などゝ女史のかつて笑ひ話しにせられしとありき。

ながむればちゞに物おもふ月にまた　長明
我身ひとつの峯の松かぜ

野路の菊（小説）

紫琴女

其二

日髪日化粧の昔日に引替へ、今は堅氣の奥様風、髪は月六才の定めにて髷は丸髷の外は、品格下るといひて結はず。お妾さんの品格とはどんなものにやと、蔭で舌出す髪結のお吉も盆暮の祝儀物、扨は芝居のお供に外れじと、喋々しきお世辭にお艶を嬉しがらす奥の手は、いつも丸三郎の噂なり。私が髪結風情ならずば、身上打込んでも大事ない男と、櫛取る手さへ止めて、心底丸三郎贔負のやうに無中になりてのはなし振り氣に叶ひ、散々人をたらせし覺あるお艶も、是にはふいと釣込まれて、下女下男よりは吝嗇と譏らるゝ身が、お吉よりは天晴切れ離れよきお妾さまと譽められぬ。

四疊半の小坐敷に　本段通二枚敷き列ねて、床の間の花瓶には白菊二三本あつさりと活けたるを右にして、椽側の明るき方に向ひ紫檀の鏡台据ゑさせ、鼠縮緬の坐蒲團の上に立膝したるお艶、今しもお吉が結ひ上たる髪を合せ鏡に照らし、小判紙を右の中指に卷きて襟のあたりを拭ひ居たるが、お吉は例のお世辭よく、煙草吸付けて先づ一ぷくと差出しつ。奥の方を冷やかに見遣りてニヤリと笑ひ、夫れではあちら様へも伺ひ升うかといふは、お秋を指さすなるべし。ハア矢張チー、同じにしないといけないからねとお艶の輕く點首くを受けて、お吉も亦仰々しくゑば〳〵點首き、眞實にチーお大低じやアあり升んチーと意味あり氣にお艶の顔を見る、此何等がお吉の三略なるべし。折から伴働きのお鈴は次の間より、太やかなる頸を突出して、アノー大丸が御注文の品を持つて上り升たと申て、前刻からお待申て居り升が。アー次へ通してお呉れとのお艶の指圖に入れ違へて太丸の手代は、早くも次の間へ伺候しつ。見上るばかりの風呂敷包手早く解きて、注文の品々ズラリ並べ立てぬ。如才なきお吉は、或は半襟の一ツにでも有り付かむかと、忙しき身の立ちかけたる腰を据ゑて、チヤ〳〵どうも立派です事チー。私し達は迚も大丸さんの、お店へは上れ升ぬから、責ては此方で眼のお正月をさして戴き升うと。あれよ是よと撰り好むお艶が、手に取るほどのもの、喋々しく譽め立てぬ。お鈴も流石年若き女のたかゝねの花とは知りながら、是も其塲を去りかねて、お艶の機嫌

とり〳〵品評めするにぞ。賑なる聲は彼方にも漏れてや、お秋の部屋に人形の着もの縫ひ居たるお靜の、何事と見に來りしが、見れば取廣げたる吳服の數々、中には我のと覺しき、赤地錦の帶もあり。秋の七草を染出したる京友仙の美しきは、丁度袷になりもやせむ白地博多に太やかなる赤の一本筋は、ちとわつさり過たれど、何れ心づくしの品ならぬはなし。物心付き初めたるお靜は、見るからに好ましく、彼や我ものとし玉ふらむ、是は如何にと、お艶の顏と品物とを、七分三分に見競べての物思ひ。なさぬ中とて、流石是をとはいひ出ねど、心を配る樣子を見てとり、如才なきお吉はにこやかにお靜に會釋し。是は〳〵お娘樣の、何日お見上げ申しても、お温和しい。おつゝけ若旦那樣の御卒業遊してお歸りなされむには、あなた樣の、いやと仰せられても、御母樣の捨置玉ふ事でなし。夫れは〳〵澤山お求め遊し升ように今から其用意にちとおねだり遊ばせとや。かゝる事いはるゝは常なれど、お靜は子供心にも恥しく、又してもお吉のそんな事いふものでなしと。ツンと濟して横を向きたる折ふし、お秋の姿チラと向ふの椽側に見えたるに心付き、オヽ伯母樣の定めて御覽なさりたかろにと、お艶がお待ちといひたる聲は耳にも入らず、足早に馳せゆきて、さも大事件の起りたるかのやうに、伯母樣〳〵アノー大丸が美しきもの、澤山持つて參り升た程に、あなたも御覽遊ばし升せぬかと我見たきもの見せて喜ばせむとの小供心嬉敷、お秋は進まぬながら手を携へられて入來りしに、お艶はジロりと其方を見たるのみ、お吉お鈴さへも無言なり。お秋は何となく氣の咎められて、椽側に佇み居しに、お靜は何の氣も注かず。伯母樣其所では見え升ぬ、こちらへお這入り遊ばせと引張るやうにして、お艶と我との間に坐らせ、伯母樣是が私には宜しいでしやう、ホラ此間申升た松村さんのお孃さんのは、ちやうどこんな風なのですよと。思はず手を伸べて、一ッ二ッお秋の方へ引寄せむとするにぞ、お艶はこらへかねて、人知れぬやうにお靜の手をピチりとひねり、およしよ、子供が出しや張るものではないと、お秋にあてゝお靜を叱り、更に又詞を更てお秋に向ひ奥樣も何か御入用にや、御入用の品あらば私迄仰せ置かれたし。奥樣のはおじみな柄、お年寄のは大低極つたものなれば、私が見計らつて、跡から鈴に持せて上升うにと、いふは敬して遠ざ

くる算段と早くも其機を見て取りしお吉、俄に空々しき辭儀を施して奥樣の何時の間に入らせられしやら、ツイ無中になつて、拜見致して居り升たので飛んだ失禮を致し升た。どれおぐしをお上げ申升うか、お鈴さん憚ながらおくせ直しのお湯をとの詞をきつかけに、お鈴も亦其意を得て、常には輕さうにもあらぬ尻振り立てゝ行く後姿にくらしく。能くも是程いひ合したやうに奥樣を玩弄にせらるゝものと。お秋よりは、大丸の手代眼を圓うして見送りぬ。跡にはお艶が好みの品々に添へて、價貴きものゝ一二反は、丸三郎の贈りものとして購はれし事なるべし。

○　　富田鐵之助

つみいでてなにかはいはむはゝき木の
露は重きも花咲かぬ身は

○　　税所敦子

さいつころある女學校の
もとめによりて
をとめ子がまなびのまどのくれ竹は
ふし立さるやみさをなるらん

夫に後れけるころ
君ならでひかぬゆつるの末終に
ゆるぶこゝろにならはずも哉

いまやう
ながるゝ水のかへりこぬ
むかしのことはいかにせん
今より後の月日だに
むなしくをしとおもへども
おもふのみにていたづらに
過やすきこそかなしけれ

理想の顔と自然の顔

雨夜亭

畫家が畫を書くに、誰も得手々々の癖ありて、人の顔や、衣服の摸樣は、何時書ても同じ樣に傾くものなり。芳年の鹿の

子の帯に熨斗の模様ある衣服、芳宗の棒縞に大なる梅花の模様、是、屢々見る所にして、人物の顔に至りては、『新小説』にも云へるが如く、歌麿には歌麿が美人の容貌あり。豊國北齋には豊國北齋が人物の容貌あり、月耕は眼の釣上つた女のみ畫き、省亭は咽の細くて平坦な女を好み、蕉窓のは眼小に過ぎ、周延のは額と眉と密接し、桂舟の島田は高島田に限り、永洗の女は矮小に過ぎ、口極めて小なり。是等の癖は技術家の方より見れば、幾度書いても腕の狂はぬ所が名譽かは知らねど、觀る人の目より見れば、千篇一律は誠に面白くなし、八百膳の料理が、同じお客樣に、來る度に變つた物を出すを自慢とするより比例しても、畫く度に變る方が客には賞美せらるゝなり。殊に新聞の續き物等や、草雙紙の如き、引續きて讀むものゝの挿繪は、人の顔が何れも同じ事では、畫を見た計で、話の大畧が分かると云ふ玄妙には到底至り難し。之を以て考ふれば、俗極まる方法ながら、昔の草双紙が、篇中の人物を役者の似顔に書いて、一々人物の容貌を區別したるは、誰の創意か知らざれども、一大發明と謂つべし。

西京だより

詩人恨み多し、到る處ろ、涙を灑がざるはなし。社友、某ふと西京に遊んで感慨無量なりけん、幾多の血ある文字を寄せたる中に、左の如き節あり。

當地も現今は紅葉さへはや色つき晴天には朝夕絡入ほしき心地致候御地もまたさかるべしと推察申居候殆んと六年中振にて當地へまゐり土地の模樣より風俗氣風の變遷甚だしきに喫驚致候婦人の髮の結ひ方より衣服まで東京風に相成殆んと京都の如き心地不致到着のみぎり七條停車場より車上見る處の甚敷東京に髣髴たるに驚き往來さへ繁くかつ足も速になりし樣見受られ候

山川は依然たる舊都

に有之候へ共諸處殺伐なる製造所建られ清浄なりし洛陽の空氣も煤烟の爲に汚され實に遺憾無極候其上貴顯紳士とか云ふ人々の別莊といふ怪しき家多く現はれ何とも不快極なく覺え申候如何なる貧民如何なる弱者も名所舊跡及び凡て景色健勝の地を樂しみ得るは眞に天の惠と感謝致居候ひしに今は其天然の勝地舊跡迄汚はしき富と權力の壟斷する處となり且つ斯る

別莊の癖

として厭ふべき者の貯蓄場なれは愈々以ていやに相成候或る大臣の如きは滯京中全く妓に戯れて他を省みざる有樣なりし如き實に小弟をして此地の爲に口惜しく思はせ申候京は美人の名所と稱せられて寧ろ實に悲しく有之候京都の美人何故唯々として顯位富貴にのみ屈從するや一人の愛に身を捧げて犧牲となるものなきか兩都の新聞を讀みて弟は常に感ず

京都には殆ど情死する者なく

東京の新聞には往々之れを見る嗚呼此舊都の地情に身を投ずる誠なきか誠なきの人には亦心性の美ある事なし京美人必竟人形的美人なりと考へ來ればそゞろに口惜く情なく被思申候本月二日發兌日出新聞紙上に

これも人の子

なる一片の記事を見亦しも小弟は長く煩悶致し候一人の可憐なる小女其父に殺されんとして家を脱走し乞食數人の爲めに辱しめられ歩行さへ不自由なる程に傷つきたるに心なき者等の玩弄物となりて淺ましくも恥に恥を重ね其恥を觀物にして僅に食を得居れりと嗚呼世はいつまで悲慘なる事の絶えざるや弟は如何にしてか救ひたき者と思へどあやにく彼女の姓なく殊に姉妹兩人のうち新聞紙活字誤植の爲め分明ならず且つは近きほとりにもあらざれば親しく探るにも難く今日に至る迄心に懸り居候慈善會などいふ者も多き世の中にかゝる哀むべき者の救はる事少きは如何なる譯やらむ左に小女の產地と淺ましき業をなし居る地名とを記載致し置き候若し助くるを得ば幾分の力も盡したく思ひ居候

產地　山城國久世郡御牧村字坊の地

河内國北河内郡招提村

姉とも(不詳)妹ひさ(八歳)

本日早稻田文學を披見致し候處近松劇の批評有之候

堀川波の鼓

は小弟の深く感動せし者に有之候故如何なる批評やあると一讀致し候處實に批評なりしに憤を起し候女主人公お種の夫に對する戀を以て單に肉感と評せし人ありしには驚かれ申候「しつぽりと物語らひし夜半もなし云々」(或は記臆の儘故句々誤あるやも不知候) 等の句に依りてかく斷言せらるゝは不思議に感ず我國の婦人は多くかゝる情感を有し亦元祿時代婦人は特に云々といはれしは我國婦人の爲に憤らざる可らず例へ肉感少からざるとも心と心誠と誠互に相投ずる處ありて初めて一人の男を慕ふものをお種が特に夫思の婦人たりしは其語句に明なり若し肉感のみの戀なりせばいかで一人の夫をかくまで深く切に慕ふべきやお種が乾したる夫の衣を見て夫の如く思はれて喜び抱きて語をかけたる一段を色情狂に近しといふに至ては如何なる意なるか了解致さず候若し是れが色情狂ならば戀は總で色情狂なるべしお種は地下に評者を怨み居るならんと思はれ候流石に逍遙氏の評にはこんな馬鹿な言葉は無之候へども人情に通ぜざる小弟にすら明なる樣な事すらかくの如き評をなす文學者能くも人情を最も尊ぶ小説など書く氣になり給ふかと弟は不審に不堪候斯る冷なる心にて近松の作などを讀みて評を加へらるゝは如何のものにや少しく怪しまれ申候今日の文界眞摯の熱情をかく故大作出でずと思はれ申候是につけても一葉女史の速に御快愈あらん事を祈居候

さる老人曰く

かへで

ハイ何事も昔に限りますよ、昔の事といへば、錆がついて、時代がついて、如何にも勿躰なく、難有味が多いですよ。今の若い方は、兎角昔の事といふと、イヤ古くさいとだの、イヤ開けないのといはしやるけれど、扨て〳〵若い方の新ら

しい、開けた事といふは、まとに失策が多くて、老人の目から見ると、可笑しくてなりません。早い話が廢刀令御發布とのかた、やつと二十四五年あまりにしかならないに、小說家ともいはるゝ物識で、刀の中子と中身とを取り間違へたものがあるさうだ。また昔執つた杵欄といふとは聞いたが、昔執りた杵鞘とは開闢以來はじめて承はつた。だがこれは近頃さる小說屋の申された名句ださうな。大小の差ひこそあれ、今時の人達のエライといふは、マアこの小說家の亞流だ、昔々としやしめる代りに、彼に類した間違ひをやらかすのだよ。御尤ですと相槌をうつた其場の若い者、それじや御老人、女學雜誌の前々號に、『御殿奉公』といふ話が書いてありましたね。左樣じや。あの中に、お上の御部屋といふ言葉がありましたが、ありやお部屋とはいひますまい、お居間でしやう。左樣じや。そうじて上つ方には、お居間御坐所といふじや、何んでお部屋などゝいふものか、ありや、筆記した男が書き間違へたに相違ない。左樣な誤りをしておいて、氣がつかぬから、今の若い者には困る、あんなとをいふと、老人共は、腹の皮の縒る程可笑しう御坐る。

時文

○闇のうつゝ

新小說第四號　後藤宙外作

甲州三坂峠の向ふ黒駒といふ處に青山晉の丞といふ大分限者があつたが、何人は世運拙く人にだまされて、身代を磨り、遂に獄屋で牢死した跡には、お磯お米といふ二人の娘と、其繼母に地震と渾名をとつたお利江といふ惡婆とがある。お利江は娘をイヂメて果ては馬追ひの賤しき業をさすとに至つたに、お磯は氣性もの何卒我家を再興せんとの志が切であつた。然るに甲府の生糸商人で喜多見といふが不圖お磯の馬追姿に見されて、三人諸共に引き取りて、お磯を本妻にするといふ約束で、一先妾宅をしつらへて此處へ置いた。處が喜多見の親類一同は、假りにも地震のお利江の娘といはるゝものを本妻にするとはならぬといひ、借錢の廉からとありて、喜多見はお磯を見捨てゝ親類伊勢屋の娘を女房にした。處がお磯は狂氣になるまでに怒り、或夜近火に乘じて、喜多見を其本宅に求めて之を刺したり。お磯其罪によりて、獄に投ぜらろ、同獄の惡女共の教育を受けて、自分が金の爲めに見捨てられたをくやみ、志を飜して出獄後一年餘も酌女を稼ぎ、ためた金に、喜多見に貰つた妾宅などを賣り代なしたる金を合せて、鰍澤に小料理屋を始め、流れ渡りの女五六人を抱へ、馴染の客には竊に枕席の塵を拂はせ、兼て此道には老練なる繼母のお利江と共に軍配の駈引毫も油斷なく、高利貸までをもなし、人の情などには泱して、靡かず、一心不亂に金を貯へ、我家再興を計れり妹お米は胥柳等の額田善助の嫁になつてゐたに、姑との中が合はぬ故、善助と飽かぬ緣を表向き斷ち切りて、姉の許にかへつて居たに、お磯は之を勸めて、善助を見棄てゝ、縣會議員の瀧澤といふに情を賣らしめ、其料金三百圓を已が囊中にをさめたり。去かれども善助のお米を思ふと切なる故、お米も亦ドウシテモ思ひ切れなくなり、其事瀧澤に發覺して、お磯は三百圓返濟せねばならぬ仕儀になつたを怒り、お米に當る殘酷に、善助はまたお米と共に奔らんとして、親父の金を竊みそこなひ勘當受けて、明神の華表で頸縊つて死んだり。お米も其跡を追ふて

富士川黒岩の断崖から身をなげて死んだ。此變事の後間もなくお利江も死んだ。斯樣な事件の爲めに、商賣が流行らぬ樣に立ち至つたで、お磯は家を疊み、貸金の流れになつてゐた黒駒近傍の土地へ家を新しく造つて、はじめて、靑山の家を再興したといふは、即ち『闇のうつゝ』の眼目なり。文章よりいへば宙外はやうやく老熟の域に達して、妙を稱すべきものあり。然れども想に至りては多く秀でたりといふべからず。全體の趣搆の如きは、因果を應照し、人事の對比をとりたるなど、あまりにも細工に過ぎたり。お磯の喜多見に馴るゝもの如何にも豹變なり、初めて相見る三日既に百年を約すなど、あれほどの氣性者のなしさうもなき事なり。其中途全くの拜金家となり濟まし、お米に對するとの殘酷なる事など、其全く前日に異なれるを尤も獄屋内の敎育は受けたるには違ひなきも、弱度に過ぎずや。而も其獄屋に投ぜらるゝやうの事も、まづ後の話を考へ置いては其後との繼き合の爲めに、態と持つて來たとしか思はれず。兎に角に餘評は措て置いて細工に過ぎて不自然になつたといふが、此作の適評なるらし。『狂美人』は宙外が五年以前の作、まだ幼稚のものなり。之を出したは、『闇のうつゝ』に比らべて、進境の著しきを示さんとの意か。

◎靑葡萄

紅葉山人作　春陽堂版

去年夏八月廿五日、紅葉山人が門下の一生西木秋葉（小栗風葉其人の謂ひか、風葉が『世話女房』にて避病院の光景を描くに密なるも、ハテナと思ひ合はさるゝ節なきに非ず。）なるもの、庭前の靑葡萄を假初に味ひて、類似虎列拉病に罹り、避病院に送られたる話、小說といふには非ずして、實事談を鋒巧みに、餘情いとも多く、ものせられたるなり。紅葉の才藻愛にも煥發して、文字頗るよむべく、而も子弟の情（筆に過ぎたるにてはなきかと思はるゝ節もあれども）の切なる、紅葉の其弟子に對するの態度、髣髴として見ゆ。たゞ恨む、此作、讀賣新聞紙上にて完璧に至らずして中絕し、靑葡萄といふ題意さへ明らかにせられずしてあるまゝに、此度の美本に裝ひかへられたるを。後編をつぐは狗尾を續ぎ、蛇足を添ふるの憾ぢありなどゝの斷り書きは、辛抱が續かずして、中途でイヤになつたとの言ひ譯には過ぎざるの譏りを免かれざらん。

◎日用百科全書第十六編　聲曲自在

博文館

此書は我邦の聲曲として知れたる、淨瑠理、端唄、都々逸、長唄等、凡て三味線に乘るものゝ、都雅なるもの、鄙俚なるもの、其文の美麗なるものを採輯したるものなり。俗謠の如き素より、鄙俚なるもの多く、君子の口に上すべきものなしと雖も、詩趣の淡々として酌むべきの調多く、此書また好箇の詩經をなすものといふべし。

◎大日本第一號

松本君平氏を主幹とし、高木信威氏を理事として、『大日本』なる雜誌出づ。編輯の體裁全く『レヴイウ、オブ、レヴイウス』に摸倣するもの。此誌未だ異彩の發揮せらるゝと多からず。願はくは、筆鋒更に健に、意氣更に雄なれ。

◎八咫烏

小波編　米僊畫　博文館版

漣山人が編する處の日本お伽噺の第壹編なるものなり。小兒に分りやすきやうに神武東征の史跡を起述し、添ふるに、『菊の御紋』なる話を以てす。無邪氣にして面白く、小兒の讀本に尤もよろし。因みにいふ漣山人が近作『風屋福右衞門』近頃の妙作なり。之を讀めば、老も幼も共に噺の中に釣り込まれて、誰れもかも小兒の氣になつて面白かると、實に漣山人が筆の妙といふべし。

◎女學文壇一斑

十月下半期

◎望東尼傳	維新史料第百八十編
◎平政子（續）〔鼎軒〕	東京經濟雜誌第八百四十八號
◎女子敎育論（承前）〔西村茂樹〕	婦人弘道叢記第貳拾五號
◎婦人の事業	福音新報第七十號
◎女子の職業（マッチ女工）	報知新聞連載
◎英國女性文豪シユライチル	國民の友第三百貳十號
◎佛敎夫婦論（續）〔横井雪庵〕	密嚴敎報第百七十號
◎本邦女敎員の統計〔田中太郎〕	統計集誌第百八十三號
◎棄兒論〔鈴木芳太郎〕	栴檀第一號
◎家庭の宗敎	高野の光第六十六號
◎女子敎育一斑（二十七）〔三輪田眞佐子〕	女鑑第百十九號
◎養子論〔山本良吉〕	如是第五十三號
◎英國婦人の思想界の戰鬪	護敎第二百七十五號

片々

◎『大和心』及『なでしこ』『大和心』は第三號發刊後『女學雜誌』に合併す、即ち本號より始まり、『なでしこ』も亦第三號にして廢刊の運に至るべきさか。

◎伊藤侯　は佛教信者なり、侯は彼藤原藤房卿が、楠公父子菩提の爲に鑄造し頴に掛けて、日本廻國せられたる虚空藏菩薩を奉持尊信し、曩に雲照律師に開眼供眼を請ひ、又征淸の役大纛を廣島に奉侍するや軍政頻繁の中にも、早晨深宵各香を焚いて至心に念誦せられたりとは『高野の光』の記述する所。ましかし侯も亦嘗て英國にて基督教を信じたりとのと。

◎六方禮經　に妻を敬するの五事を記す、曰く相待以禮、威嚴不闕、衣食隨時、莊嚴以時、委付家內と。

◎博士ブレーキー氏曰く、現今婦人が思想界に侵入し、苦戰勇鬪しつゝある三個の大問題は即ち(一)女子高等敎育の可否、大學に入學するの許否、(二)醫學敎育及醫術を業とするの眞否、(三)政治參與權、特に國會議員被選擧權を與ふる可否なりといへり。

◎マッチ　現今東京に於て製造するマッチの總量は一日百二三十噸にして、一噸一日の製造女工十人を要す。故に東京のマッチ女工は千二三百人ある譯。

◎乃木將軍の母堂　將軍將に馬首を臺灣に向けんとして、老母堂に在るものを東都に殘さんとす。蓋し臺灣地炎暑殊に甚うして、老軀を害するを尠からざるべきを以てなり。然るに北堂之を聽かず曰く、何に熱しとや、結搆じや、おれは熱いのが大好きじや、其熱い所に連れていて吳れ』と。將軍遂に辭する能はず。左手劍を提げ、右手母を携へて、新橋を發す。此母にして彼子あり、雄なるかな。

◎京都府敎育會　の敎育事項研究問題中、女子は何歲位より男子と區別して敎育すべきかを討究せるに、研究委員の意見は三ツに岐れ、甲は女子は年齡六歲即ち尋常小學第一年級より男子と區別を立つべしと論じ、乙は十歲即ち高等小學第一年頃より區別を立つべしと論じ、丙は男女全然區別を立つるは、寧ろ高等小學以上となし、尋常小學にては、專ら合併各別兩方法を混用するの可を說けり。公等翼くは愼密に之を議れ、單に坐上一條の空理を案出して之を鬪はすの小田原評定たらしむると勿れ。

◎活水女學校　長崎活水女學校は、宣敎師派女學校內關西に於ては神戶女學院に次ぐもの。此校校員生徒共に一年四回『活水女學』なる雜誌を發行す。吾人其第二號に接す、文字頗る見るべし

◎本邦女教員　明治廿七年末現在數統計を聞くに、官公私立幼稚園保姆四百二人官公私立尋常高等小學女教員四千六百七十八人。官公私立高等女學校女教員一百一人。官公立尋常高等師範學校女教員五十八人。官公私立專門及技藝學校並各種學校女教員七百三十五人。總計各種女教員は五千九百七十四人なりといふ。

◎田村鴨村　女子教育界を辭去して、身を商界に投じて以來、まばらく其高懷に接せず。然るに頃ば鴨村西都より、書を寄せて、近時の唫を示す。曰く

暴雨中踰老坂嶺

濛々寂々又科々。濕盡酒帘鎖酒家。日暮澗橋人不渡。滿山風雨一輕車。
過眼榮枯却樂天。滿城聲色是雲煙。堂々天與獨難棄。玉碎一生愧瓦全。
客氣消來無色聲。心猿不沒到功名。唯期一念知天命。未向空山捨此生。
萬峰空籟響無跡。積翠含雲氣自涼。巖際奇花人莫識。爲誰歲々薰幽芳。
滿城名士似名妓。覆雨翻雲合又離。多謝却無照心鏡。伏魔殿裡不傳奇。

◎棄兒統計　鈴木芳太郎氏『栴檀』紙上に『棄兒論』を載す。其要に曰く我國に於ては每年平均七百有餘の棄兒あり、之を一年間の日數に配すれば一日殆ご二人程に當る。

各年末の棄兒現在數は五千內外の數に在り。

棄兒の數位は、九州を第一となし、本州中區、本州西區、四國區等之に次ぐ。殊に奇とすべきは、佐賀、長崎、福岡、愛媛、香川、德島、大坂等の如く、多數の棄兒を出す所に在りては、棄兒の女兒に多きとあり。

棄兒救養上(十三歲迄救養するを制規とす)官公の手より支出する要用廿六年末には合計三万三百二十八圓にして、比年累進の狀あり。

明治二十六年中囚人出監時遷善悔悟の徵効なしと認められたる者の中につきて父母の有無を撿査せるに左表の如きものあり、

	初犯 男	初犯 女	再犯以上 男	再犯以上 女	合計
父母共に存在	一六、三八七人	二、一一一人	一二、四七五人	一、三一〇人	三二、二八三人
父又は母のみ存在	一九、四一七人	二、九八七人	一七、六九五人	一、九八九人	四二、〇八八人
父母共に死亡	一八、〇六七人	三、二九一人	一八、五二一人	二、七五三人	四二、六三二人

乃ち知る父母無き者の父母有る者に比して、遷善悔悟の徵効薄きとを、棄兒の發跡亦た寒心すべきものなくんばあらず。

時報

◎皇太后陛下御乳人白藤局逝去

皇太后陛下の御乳人たりし白藤局事富田定子には、十月十五日特旨を以て、位一級を進めて從五位に叙せられ、其翌日遂に逝去す。局は文化十二年九月二十一日を以て生れ、大和國奈良春日神社の宮司大中臣西師壽氏の次女。享年八十有二。

◎クラ、、パリッシユ孃の來朝

万國婦人矯風會第七回世界巡回遊説員クラ、、パリッシユ孃は、去月十九日を以て横濱に來着あり、同廿三日海岸教會に於て歡迎會開かれたり。同月廿四日を以て入京目下築地居留地十三番館スペンサー女史邸に假寓せらる。東京婦人矯風會員諸氏は十一月四日を以て、早稻田大隈伯爵邸内に於て歡迎會を開く。

◎熊本私立尙絅女學校の景況

熊本私立尙絅女學校が去二十一年創立以來、漸次發達して本年に至る迄、同校を卒業せしもの及び卒業後各地卒業後女教師として就任者を見るときは、實に左の如き盛況を見るに至れり

創立以來卒業生

二十三年度に八名◉二十四年度に二十八名◉二十五年度に（學級變更に付無し）二十六年度に十四名◉二十七年度に五十三名◉二十八年度に百二十五名◉二十九年度に百四十一名◉合計三百十九名

卒業後各地就任者

熊本市に十五名◉飽託郡に八名◉宇土郡に二名◉玉名郡に四名◉鹿本郡に八名◉菊池郡に九名◉阿蘇郡に五名◉上益城郡に五名◉下益城郡に二名◉八代郡に三名◉葦北郡に二名◉球磨郡に四名◉天草郡に六名◉大分縣に八名◉長崎縣に三名◉福岡縣に二名◉鹿島縣、沖繩、山口、廣島の四縣に各一名宛◉合計九十名

創立以來本年に至る入學生は總計千〇三十二名に及ぶ。

なほ熊本縣の當局者が、明治三十度の教育事業新施案として、熊本縣會に提出するべき議案中には、尙絅女學校を補助して、更に進歩せしめ、縣下中等女子教育の一大機關たらしめんとするの條目ありといふ。

◎近江婦人慈善會

同會の同地水災救助に盡力せるよしは、前に本誌にも記し置きたるが、聞く處によれば、此程横濱の平沼專藏氏は同會の趣旨を賛成し、金五十圓を寄附し來れり因みに云、同會の成立精神は、佛教眞宗主義にあるが如し。

◎貞婦賞金を得　靜岡縣志太郡笹間村澤本勝次郎妻おせきは、平常夫に事へて貞順なるのみならず、十五年の長日月、夫の病を看護しながら、克く貧困の家事をも治めて其の志行洵に奇特なるを以て此ほど靜岡縣知事より賞金壹圓五拾錢を享しといふ。

（靜岡民友新聞）

◎孝婦賜賞　三河國幡豆郡西尾町大字大給士族林熊藏姉林けんは、家道艱難に當り、日日勞役に服し、專ら之を經營し、母に事へて孝養怠らず、且子弟の教育に力を盡す等、十餘年間志操一日の如くなりしかば、其奇特を賞し金三圓愛知縣知事より賞賜。

◎又　同町大字肴町吉備侯部少養母白井くめは、歸嫁以來夫及び姑に仕事し、遇々姑難症を患ひ、病にある事七年にして死す。夫も亦病に罹り三年餘に及び歿す其間前後十有餘年の久しき、日夜看護到らざる處なく、傍ら家計を經理する等、能孝貞を盡したる廉により、一昨日愛知縣知事より木杯一個を下附さる。

（以上二件扶桑新聞）

◎伊豫郡中婦人會　愛媛縣下郡中町にては、有志者發起し、智識を交換し、婦德を進むるの目的を以て、郡中婦人會なるものを設立し、毎月最終日、郡中高等小學校内に於て開會する筈にて、天草春子なる人を會長に推薦するよしに聞く。

◎海外女界

○万國婦人禁酒會同盟會　は未曾有の大請願を、英國女皇陛下に呈したり。其趣旨は、酒類及び阿片の貿易は、社會に大害を與ふるを以て、陛下の御威德に倚り反對運動に一層の保護を與へ玉へといふに在り。之に署名したる婦人は七百万人を算し、其區域の廣さ四十四國に及ぶと。

（報知新聞）

○米國婦人矯風大會　十月セント、ルイス市に於て開會せられたりといふ

○英國女皇　には昨年六月二十日を以て、即位後六十年に滿たんとす。歷代の英王中女皇の如き在位久しく渡らせ給ふはなかりき。英國民は之を祝せんが爲めに大に準備すといふ。

○一女子の義捐金二百万弗　合衆國イクノイス州ペオリアの人ジユリヤ、プラクツトレエー夫人は、其資產二百万弗を以て、職業學校を創設することに決し、之を七人の理事に托したり。而して該校はシカゴ大學と氣脉を通じ、親密なる關係を有する仕組にて、理事も二人だけは、必ず該大學に關係あるものを擧ぐるよしといふ。

（福音新報）

明治女學校
新築費義捐

水彩畫展覽會廣告

明治女學校は府下にある私立女學校中屈指の一にて多年女子教育に熱心盡力せしに曩に不幸にして類燒の厄に罹り十年の經營一夜にして灰燼に歸せり加之校長は同時に其伉儷を失ひ內外の憂患重ね到り悲痛殆んど究る然るに該校同志の決心彌よ固く速に再築に從事し且つ一層其職務に盡瘁せんとて直に校長の名を以て左の告白文を公にせられたり

明治女學校は今を距ること十又二年（時正に明治十八年八月）世間未だ吾國人の私立に成れる女學校あらざりし時木村熊二、島田三郎、田口卯吉の諸氏其他及び不肖善治が發起創立したる者也。之より先き女學校の官立に成るもの若くは外國宣教師諸君の設置に係る者はありしが、民間士人獨立の力を擧げて新文明と吾國風とに適應したる女學校を開設せしものはあらざりし也。此に於て諸氏慨然として此發起あり、爾來十又二年、初一の精神を貫き、官に倚らず、外國會社の補助を要めず、單に同情同感ある吾同胞國民に訴へ困厄窮乏の間に漸やく發育して卒業生を出すこと一百六十名に超え、多年の精神次第に貫徹して今や全國到る所に校友あらざるはなし。就中三井銀行の諸氏は久しく懇志を垂れ昨年に及では、三井高保氏金三千圓を寄附せられ、其他某々の諸氏（其名を公にすることを好み玉はず故に明記せず）尤も同情を垂れて內外の助勢彌よ加はり、此年に至て吾明治女學校は俄然一段の發達を遂げ、前途の春色大に動きて將に近く爛熳たる光景を呈せんとせしに、今玆二月五日隣家火を發し、不幸類燒の厄に會ひ、校舍、別舍、教師館、忽然として烏有に歸し、藏書器械悉皆燒滅し、多年の經營一朝にして焦土となりぬ。然れども、吾等が女學に對して感慨する所は尋常にあらず、素より一敗の故に挫折すべけんや。今や吾等が職責は寧ろ一層重大となれることを覺ゆ、則ち彌よ奮つて倍々斯道の爲に鞠躬盡力せんことを期圖するの念や勃々たり。幸にして三井家再應の助力により同番地內の殘舍を借用して授業を續くることを得災後十日既に讀書の聲を復し現に依然として平日の如くなるも、速に新校舍を再築し器械を整頓し四方の望に副んことを熱望すること太だ切なり。仰ぎ願くは吾國同胞の諸君、徐ろに吾等十有餘年の經營を吟味し、一片の赤誠只唯だ斯道に盡瘁せんことを望んで他意なきの情懷を察せられ、幸に義捐を寄せて校舍再築の擧を助けられんことを謹て切願す。

吾等其精神の熱烈に感じ玆に在京濱名家諸君の賛助を得て水彩畫展覽會を催し收入を擧て同校の新築費に寄附せんとす世上の仁人冀くは左の概則を吟味して隆んに惠助合力せられんことを

一 此發起に賛成し水彩畫を出品せらるゝ諸君の姓名は左の如し

石井重賢君　印藤眞楯君　石川欽一郎君　本多錦吉郎君　本多忠保君　東城鉦太郎君　岡精一君
渡邊文三郎君　渡部應也君　和田英作君　河久保正名君　龜井至一君　玉置金司君　高橋勝藏君
高橋源吾君　久米桂一郎君　小山正太郎君　五姓田芳柳君　淺井忠君　有吉秀太郎君　佐々木三六君
齋藤知三君　小代爲重君　平木政次君　樋口艶之助君

（其他御協議中の諸君數多あれども御回答未着に付省く）

二 右諸君揮毫の水彩畫を來る十一月廿日より十五日間上野公園內舊博覽會第五號館（明治美術會陳列館內）に陳列し公衆の覽に供ふ

三 切符甲乙丙三種を製し仁人諸君の購求を仰ぐ

甲は一枚二圓展覽會に於て籤を抽き其の番號に隨て出品の繪畫一枚宛を展覽會閉會後に受取るものとす。但し此券は惣數三百枚に限る

乙は一枚三十錢。展覽會開會中何回にても自由に來り覽ることを得るものとす

丙は一枚三錢。一日の觀覽者の爲に供ふ

四 右切符御引受被下候仁は左の所に寸報ありたし直ちに持參御屆け申上べく候

東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

發起人

岩村透　林蓊　渡部鍬太郎　松井昇　神中糸子

日本宗教界評論の評論

日本宗教

十月二十日刊行
第二卷四號

宗教家懇談會來會者寫眞版

附錄

（釋宗演、横井時雄、大内青巒、海老名彈正、前嶋密、高島嘉右衛門、柴田禮一、織田得能、岸本能武太、村上專精、大西祝、松村介石、戸川殘花、巖本善治、姉崎正治、西依一六、小西增太郎、松島剛、綱島佳吉、加藤咄堂、布川靜淵、湯谷磋一郎、廣田一乘、安田登、渡瀨常吉、青柳猛、梅原聖兇、高津柏樹、マッコーレー、山内晉、其他諸氏總計四十八名）

◉慈悲心……………………………………社説
◉墓地……………………………………社説
◉調和圓融は大勢なり……………………社説
◉賣淫問題に就て問者自身の解釋．文學博士　加藤弘之
◉宗教家懇談會に就て……圓覺寺派管長　釋宗演
◉宗教家連合の必要……露國神學士　小西增太郎
◉將來の宗教と其資格……マスター、オブ、アーツ　岸本能武太
◉基督教古今の傳道法………………戸川安宅
◉人生目的論爭を觀る…………………觀潮花
◉蕉窓閑話……………………………圓環子
◉滴水禪師と得庵居士◉大内青巒居士とメスメリズム（叢談）

宗教家懇談會記事（二十餘頁の詳報）

◎開會前の評論（十二種）◎開會中の景況（戸川、大内、横井、釋、柴田、海老名、村上、松村、織田、大西、島田、マッコーレー、山内、安田、岸本、綱島、小西、高島諸氏の演説筆記）◎來會者の宗派、職業、住所一覽表◎閉會後の評論（十種）◉富豪紳士と宗教●宗教上四種の意見●人種競爭と宗教●谷本氏の世界及人世觀●文學と宗教等の思潮如例◎新刊書評、雜誌細目錄

定價一冊八錢、本號は紙數增加し、大附錄添へたれば、郵税壹錢●六冊前金四十五錢、郵税三錢每月二十日（一回）發行●本號の見本は郵劵十錢を要す

發行所　東京麹町區下六番町六番地第七號舍　日本宗教社

明治廿七年一月十四日内務省許可
明治廿九年十一月九日印刷
明治廿九年十一月十日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

明治廿五年三月十五日遞信省認可



明治廿五年三月十五日遞信省認可

